
東方孝之伝（努力伝）

アリストリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方孝之伝（努力伝）

【NZコード】

N9714K

【作者名】

アリストリア

【あらすじ】

とある事情で転生入り（幻想入り）するお話です。

主人公の孝之はとある事情で転生してしまつ。転生する前に神様がとある能力を授けてくれた。

これは作者が初めて書いた小説です！ たぶんあれですがよろしくお願いします。

神様の部下のせいでの転生入り（幻想入り）

「はあ～またやられちまつた」

薄暗い部屋の中に一人いる少年？河野孝之はそう呟いた。

孝之は肩をがっくりと落とし、深いため息を吐いた

「あと少しあと少しで東方紅魔郷をクリアできたのにな

そう独り言を呟きながらPCの電源を落とした。落とした後、椅子にもたれかかり先ほどプレイしてたPCゲーム東方紅魔郷をやり始めた理由を思い出していた。

元々、孝之はゲーム好きでRPG系ゲームは大好きなのだがSTG系のゲームは嫌いだった。嫌いだったのだが、4年前ぐらいに友人がこの東方紅魔郷は絶対にはまるからと言られて、友人の前でやつてみたのだが、意外に面白くやり始めたら止まらなくなつて3時間以上ぶつ続けでやつてしまつたんだつけな？と孝之は思い出していた。

色々と思い出してるうちに、孝之は椅子から立ち上がり背伸びをしながら欠伸をした。

「眠たいな、そろそろ寝よつかな」

明日は学校もあるしーと心で思いつつ服を脱いでパジャマに着替えてベッドに寝転がる。

「おやすみ」

やうやくながら目を閉じ意識を手放した。

寒くて目が覚めた、目が覚めたのだが周りには何もなく真っ白な空間が広がっているだけだった。

「夢だな、真っ白な空間で自分の意思で歩けるだなんて夢だな

自分の頬を軽めに叩きながら立ち上がる、向でこんな夢を見るんだどう、意識もしつかりしてゐし、ちやんと自分の意思で手足が動く。

「あつと『のせいだ、夢のはずなのに手足が自分の意思で動くなんて、あつと夢に違いない』

現実逃避しながら辺りを歩く、やつぱり真っ白な空間で周りには人が一人もいない、叫んでも反応なんてなし。

「やだなあ、目を覚ませ俺よ目を早く覚ませー。」

さつきより強めに叩き始める、もしも真っ白な空間に知り合いかいたならば、変態扱いかマゾヒスト扱いになつていただろう、歩き回つて3時間ぐらいたつたのだろうか、流石に疲れてくる。

「疲れたゾエ」

ふぞけながら座り込む、ビリしてこうなつたんだ、そう思いながら田を開じた。

田を開じて10分ほど過ぎた。10分間ほど色々と考えた結果、口コは夢の中ではないとそう結論づけた。手足も動くし考えれるし、夢の中とは考えられなかつた。とにかくどうやって口コからでようかなと考えようとしていたら声が聞こえた、何となく自分の名前を呼ぶ声が聞こえた……と思つ。孝之は田を開けて立ち上がつた。

「何か右の方向から声が聞こえた!」

孝之はこの真っ白な空間で声が聞こえたのに驚きつつ、声が聞こえた方向に走り出した。走り出して2分ぐらいか、真っ白な空間に一人の男性がいた、髪は金髪でスポーツ刈り、顔は目がキリっとしてて鼻はちょっと大きい、唇の色は赤色、服装は中学生が着る学ランを着ている、孝之はその人物に声をかけてみた。

「すいませーん、急に変な事をさきますけど、俺の事呼をびましたか？」

できるだけ丁寧に聞いてみた。

「呼んだよ、河野孝之」

この言葉を聞いて、とある事に気がついた、何でこの人物は俺の名前を知っているのか。孝之はそう思い、何で自分の名前を知っているかと聞いてみようとしたとき。

「何で君の名前を知っているのかって？　それは私がこの世界で最も偉大なる神様だからだよ」

自分の思っている事を言われて驚いたつてよりも、イキナリ自称神様つて言う人だから、頭がかわいそうな人だと心配してしまつたつていう寛恕が強かつた。

「イキナリ失礼と思ひますけども、あた「頭は大丈夫だぞ、あとかわいそうな人とはなんだ、まるで私が頭がどつか逝つてるみたい」とを思うでない」

「どうやら、この自称神様は何故か俺が思つてゐる事が分かるらし。い。孝之はやう思いつつ、なぜ自分を呼んだのかを聞こうとしたら。

「呼んだ理由はいくつかある、覚悟して聞きたまえ」

ちよひと喋らせりつて思つたが、いちいち喋らずに相手に聞いたい事を伝えられるのならいいだろ、孝之はそう思い黙つて自称神様の話を聞くことにした。

「先ず一つめ、君は死んだ」

やつぱり、この自称神様は、どうやら頭が逝つてゐるようだな、話を聞くつもりの孝之であつたが、流石にこの自称神様の話してゐるところ予想より斜め上だったので、自称神様に背を向けて歩き出そうとした。

「私の話を聞け、河野孝之」

ベキゲキベコオーと変な音がした、孝之はなぜか出た冷や汗をかきながらその音がした方向……さつき自分がいた場所を見た。

「私の話を聞く気になつたか、河野孝之よ」

先ほど自分がいた場所は、でっかく陥没した、何か巨大でとても重たいものを高いところから落として陥没したような跡、辺りには俺と自称神様しかいない、必然的に、あの自称神様がしたことになる、冷や汗がでていたがもつとでた、あの自称神様が言つてることは全て本当だと、もしも先ほどのようにもう一度自分が同じように背を向けて話を聞かなかつたら、あの地面のようになに陥没する、いや、押しつぶされると、そう孝之は思った。

「やつと話を聞く気になつたか、なら話を続けるべ。2つめ、河野孝之、お前には違う世界に行つてもひらつ、早く言えば転生……憑依か？まあ、とにかく転生だ」「

自称神様……いや、神様はどうやらやつとひつ憑依とか転生とか難しい言葉は苦手らしい、孝之はそう思つて、何で自分が死んだのかとお思いはじめた。

「確かになぜ自分が死んだのかが不思議だらつ」

神様はなぜ死んだか理由を言い始めた。

「死んだ理由はだ、私の部下が河野孝之の「孝之でいいです」孝之の寿命を面白半分で弄くっちゃってね、それで死んじゃつたってわけ。スマンね」

さつきまで偉そうにしてた神様が、謝ってきたので、少々びっくりした。どうもこうも、神様が謝る必要なんてないのに、そう思つたからだ。

そして、死んだんだな俺は、証拠なんて無いのになぜか納得してしまうだなんてバカだな俺は、そう孝之は思った。

「神様が謝る必要なんて無いですよ、謝りせむなら神様の部下です
よ」

「いや、部下の責任は上司の責任でな、部下も一緒に謝らせようと思つたのだが、ちょっとお仕置きをしそぎてしまつてね、とにかくスマンな、それでだ、孝之

神様に呼ばれた孝之は素直にハイと言つた

「転生する君には、とある能力を授けたいと思つ」
神様がそう言つた。孝之は能力を授けると言られて少しだけ嬉しかつた。もしかしたらチート万歳なんてできるかもしれないからだ。

「その能力とは……」

孝之は唾を飲み込んだ、ゴクっと音が周りに響いた感じがした。とても緊張してるんだと思った。

そして、自分で気づかぬうちに、神様と同じ言葉を発していった。

「その能力とは……」

その言葉を聞いて、神様はニヤつと笑い言った。

「努力すればどんな力でも手に入れる程度の能力だ」

その言葉を聞いて唖然とした、程度の能力、東方シリーズのキャラクター達が持っている能力の呼び方の最後でつく言葉……例えば、主人公の博麗 霊夢と霧雨 魔理沙の能力は、『空を飛ぶ程度の能力』が靈夢の能力で、『魔法を使う程度の能力』（主に光や星を元にした魔法）が霧雨 魔理沙の能力、とある事が頭に思い浮かぶ、神様がなぜ程度の能力と言ったのか、自分はもしかしたら。

「もしかしながら、孝之が思っているとおりだ、君は東方の世界に転生する、実は転生とかはダメなんだが、今回ばかりは私のミスだからな、それじゃ、転生させるから目を閉じるんだ」

命令口調だが優しくて満ち溢れる声に孝之は嬉しかった。自分を心配し安心させてくれるような声に嬉しかった。流石にペシャンコにされるかと思つた時は怖かつたが、けど少し心残りがあった。

「母さんと父さんがどうなるんでしょう？」

もう孝之の心残りは父親と母親にあった。朝起きたら息子が死んでました。なんてことがあつたら、父さんと母さんは悲しむと思つ。そこまで愛してもらつての自信があるからそう思えた、「安心しろ、私任せなさい」

「ひーっと笑つた。何となく神様に任せてもいいかな、孝之はそう思い、畠を開じた。

「では、始めるべし

畠を開じてると、何か呪文のような声が聞こえる、なんて言つてるか分からぬけど、少々不気味だな、そう思えた。

そして、だんだん立つてゐるのが辛くなつていき倒れた。意識がなくなる寸前に聞こえたのは、神様の「頑張つて來い」という励ましの言葉だった。

神様の部下のせいで転生入り（幻想入り）（後書き）

はじめまして、小説を書くのは初めてになります、ですので色々と批判があつたりしたら怖いですが、小説を書いたりするのを上手くなりたいので、ドシドシと批判または励ましの言葉とか感想をお待ちしております。

小説を読んでくれる人に感謝です。

編集してみた。

嫌だ・・・（ナツノタロイ表現とがR-15かもしだせ）（改）（前書き）

いつも頑張つて更新してみました。

孝之は神様のおかげで転生しました。

嫌だ・・・（けつ）つクロイ表現とがR-15かもしれませゑ）（改）

走る音と自分の息遣い、そして心臓の音が嫌なほどハツキリと聞こえる。どれくらい走つただろうか、ふと後ろを振り向いた、どうやら妖怪は追つてきてないらしい適当に走り回つたのが良かつたのか、とにかく安堵した孝之は走るのを止めて歩き始める、数分してから孝之は腰を下ろし座り込んだ。

「疲れた」

まだ微妙に息が乱れてるから深呼吸をする。少しだけほんの少しだけその場で休憩をしようとおもつた。

「どうも今日は厄日だな」

そう苦笑いしながら先ほどの妖怪の姿と犯人の姿を思い出す。あたり一面に広がる血の匂い、その匂いを思い出したら吐き気がした。はじめて人の死体をみた、その死体が臓器を撒き散らした死体なのだ、当然といえば当然といえよう。

「うつ……気持ち悪い」

とにかく気持ち悪いから吐いた。吐いて吐いて吐いた。もう吐出る

ものなんてないのに吐き気が止まらない、胃液が口から出て地面に落ちる、いくら吐いても吸まらずどうしようもなかつた。吐いてから結構時間がたち吐き気がなくなりはじめて何とか足腰に力が入りだした。

そして、孝之が歩き出そうとしたらソイツが現れた。後ろから何かいると、孝之は感じた。

「嘘……だろ」

そういうながら、孝之は後ろを振り向く、長い体に足がモジヤモジヤといっている、して、先ほど人を食つたかのように血が口元についていた。

「やばいかな」

恐怖で息が荒くなつてきた。逃げようにも足が一歩ずつしか動かない、一步また一步と後ろに交代していく、後退していくと何かにぶつかつた。後ろを見てみる、木が生えていた。でかい木だ。

「死にたく……ないよ」

そう言つた。妖怪に追い詰められ、恐怖で孝之の呼吸がさらに乱

れてきた。生きたいと、生きて色んな人に出会いたいと、父さんと母さんに自分が無事だよつて笑顔で言いたくて、とめどなく涙があふれだし、叫んだ。

「まだ俺は生きたいんだ！　だからくるなああああ！」

叫んだ。大きく叫んぶ、森の木がざわめき始める。森の周辺に孝之の声が響き渡った。その声に反応したかのように、妖怪が飛び掛けた。

1日前

転生してから7年の歳月が過ぎた。

河野孝之は、飯野孝之に転生した。転生したて頃を思い出していた、したての頃はとにかく困つたものだつた、オムツを替えてもらつたり、母乳を飲ませてもらつたりと、色々と恥ずかしい出来事があつたが、慣れとは恐ろしいもので母乳を飲ませてもらつたりオムツを変えてもらつたりされとも、恥ずかしくなくなつた。

そんな事を孝之が考えて居ると、母親の呼ぶ声が聞こえた。

「孝之ー、『飯できたわよーー。』

「ハーイ」

孝之は力なく返事をする。

「今日は焼き魚と納豆よ」

母親である麻衣が今日の晩御飯の内容を言つた。その内容に孝之は腹がぐ~っとなる音が聞こえた。麻衣が作る料理は絶品で、とてもおいしいからである。

「いただきまーす」

麻衣と孝之は声を合わせて呟いた。

「母さん、今日は父さん遅いね」

孝之は麻衣に言つた。いつもなら晩御飯までには帰つてくれるはず

なのだが、今日は何があったのだ？が、やつ心配してしまつ。

「ほんとに遅いねわね、ねね孝之、」『飯を食べ終わつたら、お父さんを呼んできてくれないかしら』

優しい口調で麻衣がやう言つた。

すぐ近くに父親である初春が経営している店があるので、別に断る理由がなかつた。モチロン少しでも遠かつたら断つてはいたが。

「分かつたよ、ゆゑん

やう言つたあと、孝之は、『飯を急いで食べた。

「」『もうやつをまどした』

孝之はやう言つて、麻衣も孝之が『うがひつれまでしたと』やうつたので
麻衣も言つて。

「それじゃあ、ちょっと行つて来るねー」

「『氣をつけてね』」

「はーーー！ 気をつけていってきまーす！」

孝之はやうつて、家を出た。空を見上げれば完璧に夜になつて
いる、孝之は少々怖くなつてきたので、孝之は知りだした。

”feels like HEAVEN”を鼻歌で歌いながら初
春の店に向かう、走っていたら孝之はある事に気がついた、自分
の足音とは違う足音が後ろから聞こえるのだ。

「[冗談はヨシ]セモだゾエ？」

アホなことを言いながら後ろに振り向いた。

「誰もいなか……氣のせいか」

孝之はふうっと息をついた、そして歩き初めて数分たつた頃か、
また後ろから足音が聞こえた。さすがに背筋がゾッとした。

「誰もいませんよね～？」

そう後ろに振り返つて見たものは、脂ぎった顔の男が、何かを振り下ろす姿だった。驚いた孝之は腕で顔を守ろうとしたが、間に合わず意識が飛んだ。

「ハハハハコトハアハアハア何処なんだ」

田を覚ました孝之は、一人そう呟く。周り暗く見渡してみるが誰もいない、周りには木がいっぱいならんでいた、たぶん何処かの森なんだろ？と、そう孝之は思った。そして、何故意識を失ったのかを思い出すと田を閉じた。

（確かに父さんを呼びに行こうとして、家を出た、それから確か……痛いっ！）

頭に突然痛みがはしった、それで何で意識を失ったのかを思い出す、自分は何かに襲われて意識を失ったんだ、これってもしかしながら誘拐だよな、そう孝之は確信した。バキッと言う枝を踏んだよつの音がした。

「誰か……いるのか」

恐怖で震づかないいつかに言葉を発していった。

「起きたんだね」

暗闇の森の中から声が聞こえた。

孝之は田を開き言葉を発した場所を見ると、脂ぎった顔に丸く太った体の男が出てきた。

気持ち悪い。孝之はそう思った。

「孝之ちゃん」

鼻息が荒くして、気持ち悪い声で孝之を呼んだ。呼ばれたことに不快感を感じながら、何となくこいつが自分をこんな所に連れてきた犯人だろうと確信する。孝之は、その気持ち悪い犯人を睨みつけながら言った。

「何故俺の名前を知ってるんだ」

孝之は睨みながら何故自分の名前を知っているのか聞いた。

「ハハハハハ、睨みつけないでよ孝之ちゃん、お兄さん少し興奮しちゃうよ」

少々この犯人は性癖がおかしいと孝之は判断した、そして、何故自分を連れてきたのか何となく分かつた感じがした。

「なんで知ってるか知りたいんだっけ、教えてあげてもいいけど、僕の言う事を聞いてくれたらね」

聞かないでも分かる、先ほど思つたとおりだつた、これから何をされるとか、そういうことを覚悟する。本当に気持ち悪くて吐きそうだ。孝之は犯人に言つた。

「聞きたくない、お前の言う事なんて聞いてやらない」

そう孝之は言つた、犯人は強がつてゐるだろうと思つたのだろう、顔をニヤニヤさせながら、こちらを見てくる。、実際のところ孝之は本当に強がつてゐるだけなのだが。

孝之はとある事を聞いた。

「なら口元をニヤニヤさせながら言った。
う？」

犯人は口元をニヤニヤさせながら言った。

「ここには魔法の森だよ」

それを聞いて思った。ここが“魔法の森”という事は危ないと思った。初春と麻衣から“魔法の森”は危険だと何回も言われてる。そして何か、よく分からないが“勘”みたいなのが働いた。こいつは明日の朝になつたら死ぬと、そう頭によぎつた。バカバカしいと孝之は首を横に振つた。そんなことあるわけないと、自分の考えを否定した。どうも精神的に参つてゐらしい。そう結論づけたら、急に眠気が襲つてきた。

「おや、眠たいんだね、お楽しみは明日に取つとくか、おやすみ」

犯人はそう言いながら孝之の近くで座り込んで寝ようとした。孝之は犯人が近くで寝る事なんてどうでもいいよつて、目を閉じ意識を手放した。

3時間30分前

「なにが、どうなつて……」

孝之はやう呟いた。

何か叫ぶような悲鳴が聞こえて、目が覚めて起きたらこの状況、昨日頭によぎつた事を思い出したが、実際に目の前で起きたことに呆然と見ていた、田の前では孝之を攫つた犯人がでつかいムカデみたいな妖怪に食われて物言わぬ骸になつてゐる姿になつていた、体は裂かれ、臓器なぞを食い荒らされ、口からは血の泡を吹き出していた。周囲には血が飛び散つてゐる、孝之の顔に血がつく、鼻を突く、どうしようもない鉄臭い血臭、どうする事もできず足が震えて動かない。ただ孝之はその姿を、見てゐることしかできなかつた。

「逃げ……ないと」

孝之はそう呟き、震える足になんとか力を込める、まだ微妙に震えているが、立ち上がりつて走つて逃げるとそう思えた。

「早く立ち上がりつて逃げないと……まだ死にたくない」

逃げようとした時、ふと食つてゐる妖怪と目が合つたような感じがした、妖怪が一時食つのを止める、こちらを見つける、食つから動くな、そう言われたような感じがした。孝之は後ずさりながら立ち上がり、急いで逃げた。

7歳児のスピードで妖怪から逃げれないのは分かる。分かるが、あのムカデみたいな妖怪だ、もしかしたら逃げれるかも知れない。

そう思った。

そして現在

「まだ俺は生きたいんだ！　だからへんなああああー！」

孝之は目を閉じた、あまりにも怖くて、本当に泣いてしまってもなくて、誰か助けてと、神様に祈った。

「死になさい」

声が響き渡った。その声が聞こえたと同時に、何かでかい音がした。まるで何かが爆発したような音が妖怪のほうから聞こえたのだ。

「小さな子供を食おうなんて馬鹿げた事をしてくるわね」

頭に何かがのつた。

「まあ、妖怪は人間を食つのが当たり前かもしれないけどね

孝之は目を開けて声がした方向を見る。

「もう大丈夫だからね」

そこには金髪の女性で“カチャーシュ”をつけてたのが印象的だった。そもそも妖怪が動く、どうやら死んでいなかつか。

孝之の体がビクッと震えた、震えたがすぐに震えが収まった。金髪の女性が頭を撫でてくれたからだ。安心させるように、優しく優しく撫でてくれた。

「どうやら、まだ生きてたみたいね。待つてね」

そう言つて女性は一步前にでた。

「生きてる意識と理性が無くなつた妖怪……まったく、無くなつてるなり潔く死んでくれたらマシなんだけね」

一瞬だった、女性は自分の前方に人形を出現させて、紫色の何か光るレーザー？みたいなものを発射させていた。レーザーのスピー

ドはとても速く。まだ幼い孝之には見えるはずもなかつた。瀕死の妖怪に避けるすべはなく、体中がレーザーに貫かれ血飛沫と悲鳴をあげた。

その光景を見て孝之は緊張び糸がとれてしまつたのか孝之は倒れてしまふ。意識を失う前に聞こえた声は倒れた孝之を心配する金髪の女性の声だつた。

嫌だ・・・（けつ）うつクロイ表現とがR-15かもしだせん）（改）（後書き）

どうでしょ「うか？」

ちょっと色々と変更してみました。

いろいろとダメダメですよね。

どうも戦闘シーンとかは苦手です。

主人公が何を考えているとか表現するとか苦手ですね。

そのうちに主人公設定を載せますので見たい人は見てください。
ネタばれ注意ですけどね。

まだまだ小説を書くのは苦手ですけども、今後ともお願ひします。

ご感想ととかお待ちしております。

NGシーン？ 適当な妄想で書いてみる

犯人が何で先に死んだのか （注意 これは本編に関係なし）

犯「ウホッ！ いい妖怪！」

妖「オレオマエマルカジリ」

犯「アツー！」

謎の金髪女性が孝之に思つたこと（注意 これは本編に関係なし）
女性「（この子かわいいわ……この子を私の家に持ち帰つて禁断の
プラトニック愛をオオオオオオオオオオ！）ブシヤアアアアアアア
鼻血が出る音

そして妖怪を倒してからの

孝「ちょ、やめ、アツー！」

その後、孝之の姿を見たものはいなかつた。

編集してみた

謎の女性は魔法使いー（前書き）

謎の女性に助けられる

謎の女性は魔法使い！

音がした。ズルズルと何かが這いすり回るような音が聞こえる。後ろに振り向いた、そこには内臓を食われ死んでいる一人の男と、ムカデみたいな妖怪がいた。孝之は逃げ回った。逃げて逃げて逃げ回ったのに、何故か逃げ回った先々にその光景がでる。どうしてどうしてどうして、そのムカデ妖怪がイキナリこちらに向かつてきた。逃げようとしても、何故か足だけが金縛りにあつたみたいに動かない、だんだんと距離が縮まつてくる、なんで、どうして、頭にその言葉ばかりが思い浮かぶ、力がほしいよ、自分を守れる力がほしいと、そう願つた、願つたところでイキナリ自分を守れるぐらいの力がでるわけもなく、その妖怪と自分との距離が0になり襲い掛かられた。

「うわあああああああ！」

「キヤツ」

息が乱れてる、自分が何処にいるか辺りを見渡す、先ほどの光景は夢だったのか、そう思い、孝之は汗をかいてることに気づき額の汗をぬぐつた。もう一度辺りを見渡してみた何か分厚い本とか人形がいっぱいある部屋にいるらしい、そして金髪の女性がすぐ近くにいた。

「大丈夫？ とてもうなされてたみたいだけど」

声が掛かる、金髪の女性が言った

「あっ、はい、大丈夫です」

そう言葉を返した。

「そりゃ、ならよかつたわ」

安心したような顔で後ろに背を向ける。

「今、暖かい紅茶を入れたんだけど、飲める？ 一応緑茶もあるけど？」

そう金髪の女性が聞いてきた。手元にはティーカップが握られている。どうやら孝之が子供なので紅茶が飲めるのかと聞いてるようだ。孝之は少し迷いながら答える。

「紅茶なら飲めますよ。それと、危ないところを助けていただきありがとうございます」

孝之は妖怪に殺されかけたところを、この女性に助けてもらつたのを思い出して礼を言った。女性はクスクスと笑いながら言った。

「別にいいわよ、私はただ歩いてたら、あなたが妖怪に襲われそうになつたところを助けただけよ。ホントは、あなたの事を見捨てるつもりだつたのよ。けど、何となく気紛れで助けただけよ」

「そう金髪の女性は言つた。孝之には何となく分かつことがあつた。この女性は見捨てるつもりなんてなかつた。その証拠に微妙に頬が赤くなつてこり、どうやら照れやのようだ。

「いえ、あなたに助けてもらわなかつたら、俺は死んでました。本当に助けてもらつてありがとうございます」

ベットの上で頭を下げてお礼を言つ。女性は、また微妙に頬が赤くなり、無言で紅茶が入つたティーカップを渡してくれた。

「ありがとうございます」

ティーカップに入れられてる紅茶からは湯気が出でていた。ちょっと飲んでみて、ちょっと熱いかもって思いながらも、この紅茶おいしいなつて、そう孝之は思えた。

「私の名前は、アリス・マーガトロイド、魔法使いよ、アリスって呼んでちょうだい」

孝之がちびと紅茶を飲んでいたら、金髪の女性が自己紹介をした。そして、アリス・マーガトロイド。そして魔法使い、その名前に何か聞き覚えがあつたが、氣のせいだと思い、孝之は自分の自己紹介をした。

「俺の名前は飯野孝之って言います。アリスさんの呼びやすいやうに呼んでください」

孝之は力に挨拶をした。

「なら孝之って呼ばせてもらひわね。よろしくね、孝之」

そう言つて握手を求めてきた。手を出してきて、少々びっくりしたが、すぐに手を握つて握手をした。

「ねえ、孝之、少し聞いていいかしら」

遠慮気味にアリスが孝之に問いかけた。

「どうして、孝之は、あんなこといったの？ 妖怪に襲われたし、孝之は子供だから、普通は人里にいるとおもうんだけど……教えてくれないかしら」

できるだけ優しくアリスは孝之に聞いた。その言葉を聞いた孝之はどうして人里からでて魔法の森にいたのか、どうして妖怪に教わったのか、理由を話した。アリスは、少し悲しそうな顔をしながら、孝之の頭を手を置いた。

「私が明日必ず、あなたを人里まで送つてあげるわ」

そう言わながら頭を撫でられた、涙が出た。父さんと母さんにもう一度会えるんだという涙、そして、自分はひょんと生きてるんだっていう涙。

「よしよし、辛かったわね。安心していいのよ

アリスが孝之の頭をギュッ自分の体で包み込む。

「今は寝なさい、孝之は少し疲れてるのよ。おやすみなさい

そう言わると、自然に瞼が落ちていった。

「アリ……スセニ、ありがと……」じれこ……めす」

孝之はやう言い、意識を手放した。

「んっ」

田が覚める、とても楽しい夢を見てたな、そつおもつた。

「よつこせりと、つてあれ?」

孝之は上半身を上げてベットから出ようとしたが、何故か動かなかつた。そして、体に違和感があった。何かが抱きついてるような感覚、何かスースーと音が聞こえる、その音がする方向に首を傾げた

「なつー。」

驚いた、顔を傾けたら、アリスの寝顔をドアップで見てしまったからだ。

顔が赤くなるのが分かる、どうしようもなく赤くなり、口をパクパクさせてしまつ、寝顔をジックリと見るわけにはいかないので、目を閉じた。

(どうしよう……とっても恥ずかしいし……しかし、アリスさんつて美人だよな)

孝之は、また顔が赤くなるのを承知でアリスの寝顔を見た。やっぱり顔が赤くなる、やつぱり恥ずかしいので目を閉じた。

(ダメだ……まともに顔が見れないよ)

こんなことを考えようと頑張つてみるが、アリスの寝顔が忘れられないらしく、目を閉じても、顔が赤くなるしまつ、そして一番意識をしてはいけないことをしてしまつた孝之。それは。

(アリスさんの寝息が首に当たつてゐるしーー。)

ひつして一人で悶々とした時間はアリスが起きるまで続いたとさ。

謎の女性は魔法使い！（後書き）

どうだったでしょ？ か少々頑張つてみました。

レビュー感想またはアドバイスなどをお待ちしております。

もしものお話（注意：ここから下にある話は本編とは関係ありません）

せん）

アリスがもし変態だつたら

ア「私はアリス・マーガトロイド、趣味はあなたのよくな子供を攫

う事かな」

孝「えつ！」

ア「さあ、虜になりなさい！」

孝「アツー！」

アリスがもしも妖怪が孝之を襲つてないと判断して素通りしたら。

（壊）

孝「死にたくない」

妖「オマエオシリマルカジリ」

孝「ウホッ！ いいよウカアツー！」

編集してみた。

これ置き難い。アレ、カルトの出でで。(謹書也)

こんなありました。

以上

こわ門番に…そして、チルノとの出来事。

「あたいはね最強なんだよー！」

孝之におんぶしてもらつてる妖精のチルノは、そんな事をいった。そなんだ、すじいねーつと、適当に答える。しかし、微妙に重い。7歳児なので筋力があまりないのは当然なのだが、なんとなく口に出して重いとは言わない。言つたら命が消えそうだからだ。

「へへーん、すごいでしょー！」

誇らしげにチルノは言つた。孝之はため息をつく、チルノと仲良くなれた事は嬉しいが、背中が冷たい、どうしようもなく冷たい、体が寒さで微妙に震える。

「あ、そこ真っ直ぐね、もうすぐくよー！」

チルノは元気よく言つ、チルノは元気だなーつと思いつつ、孝之は足を動かした。目指すは紅魔館の門番。紅美鈴に会うために。

数時間前

あの誘拐騒ぎから早1ヶ月、孝之が人里に帰ってきた時は人里の皆は大騒ぎだつた。母親の麻衣と父親の初春には泣かれた。孝之もその姿を見てグワッと何かこみ上げてくるものがあつたが我慢した。孝之は、あの夜に、何があつたかを話した、誘拐されたり、妖怪に襲われかけたところを、アリスに救われた事なを話した。その話を聞いて孝之の両親は暴走、もといお礼をしようとした。

すぐ隣にいるアリスに、麻衣と初春が抱きつきお礼を言いはじめる、そして、初春が、宴会をするぞー！ と周りを盛り上げ始めて、飯野家で大きな宴会が開かれた。

アリスは、少し嫌がつてはいたけども、宴会をし始めたら、楽しそうにニコニコと笑つていたのでよかつたのだろう。宴会が一夜あけて孝之の目が覚めたら、アリスに抱きつかれてるのはいい思い出だろう。なぜ抱いて寝るんですかと聞いたら、抱いて寝ると心地よいからという事らしい

アリスが人里から魔法の森に帰る時、とある人形とお守りとアリス館までの道のりを書かれたメモを渡された。

何でも、人形とお守りには、アリスの魔力が込められており、妖怪避けになるとの事、暇な時に遊びにきてねと言われた。

誘拐事件のことを思い出しながら、アリスの家でため息をつく、何故アリスの家にいるかなど、アリス家に4泊5日の予定で泊りにきてるからだ。

「どうも、暇だな」

孝之はそう呟く、アリスの家には色々な本が置いてある、前までは童話から色んな小説類の本までいろいろあったのだが、今では、魔法書から魔術書そして魔道書まで置いてあるのだ。

アリスが魔道書とかを普通に置くようになったのは理由があつた。アリスの家に約5回ほど遊びに来たときだつただろうか？ アリスがでかけるのでの家でちょっとお留守番をしていたのだが、暇になつて本を読んでいたのだが、何回もアリスの家に来るので、だいたいの本は読破していた。

孝之は、違う本はないのかと探し始めたら、地面に何かが落ちたのだ。とてつもなく分厚そうな本でレメゲトン（Lemegoton）（）そう書かれていた。

何となく、その本を拾つた孝之は、アリスが帰つてくるまでその本を読んでいた。アリスが帰つてきた事にも気づかず、本に没頭していた孝之だつた。アリスは孝之に声をかけて、それは魔法書よつと言つたのだ。

孝之は魔法書を読むのは危ないの？ って聞いたら、危ないと答えられた。たしか、魔法書とかは一般人が読むと発狂して死に至つてしまつらしい、普通に読める人は魔力がある人だけらしい。

そして、それ以降、魔道書から魔法書そして魔術書まで普通に置き始めたのだ。時々アリスは人里にきて孝之の母親と父親にとある話しをしているのを孝之は知らない。そして、後で何で俺が読んだのが魔法書つて分かつたのつて聞いたら覗き込んだと、アリスが孝之に教えたのだった。

少し回想が長くなつたが、孝之は本当に困っていた。

「うへんうへん、アリスさんは、用事で人里に行つてゐしな、俺も何処か出かけるかな」

少々悩んだ結果、お出かけする事に決めた。

「しかし、何処に行くかな、迷つな

やうぶつくを言ひながら何処に行くか迷つていた。ここから出かけるにしても行き先を決めない事にはどうにもならない。

3分ぐらい悩んで、とあることをひらめく。何かを思ひ出したような顔だった。これなら色々と一石二鳥だと、孝之は思った。

「あとは、適当な紙に書いてテーブルの上におくか」

フムフムランファンファン と意味分からぬい鼻歌を歌いながら、アリスにでかけますと置手紙を書く。

「よし！ 準備万端だ！」

そう言つて、アリスの家を出た。

「おおー！ でけー！」

孝之の田の前にはでかい湖があつた。水に濁りはなく、透き通つている。道中なにか金髪の女の子に食べられそうになるハプニングがあつたが、なんとかここまでたどり着けたようだ。孝之は湖に足を入れてみた。

「冷たいけど、気持ちいいなー！」

テンションがついつい上がってしまい、大声で叫んでいた。ミスつたと思い、口を押さえて周りを見渡す、だがすでに遅く湖の向こう側から結構早いスピードでこちらに向かが向かってくる。

向かってくる物体を見る。背中に氷の翼が生えており、髪の色は水色？ あと服装は青色だった。昔の記憶を掘り起しそう、氷の翼氷、そして思い出す。

「あれは、チルノなのか？」

どうも7年前の記憶だから自信なさげに呟く、あと2分か3分ほど考えられる時間があるのなら、完璧に思い出すことができるのだが、考える時間はなさそうだ。何故なら、すでに孝之の近くまで迫つてゐるからである。

「あたいの縄張りで何してんだけー！」

元気いっぱいの可愛い声があたいちめんこじだました。外見年齢的に10歳が11歳ぐらいの背丈ぐらい。

「何してんだけだ、って言われてもね、ちょっと湖に足を入れて涼んでるだけなんだが」

孝之は冷静に話をする。とつあえず孝之は、元気いっぱいの女の子にお菓子を上げて仲良くしようと思つた。もしも、この子がチルノなら自分の目的地に案内してくれると思ったからである。お菓子といつても、お饅頭だが。

「お饅頭こる？」

孝之は、お饅頭を手に持つて、女の子にこるかい？と勧めてみ

た。

「こ、こ、こ、るー、ち、よ、う、だ、いー！」

女の子が孝之のそばまできたので、渡した。饅頭を食べてる女の子に、孝之は自己紹介をしてみた。

「俺は飯野孝之って言つんだ。君の名前は？」

女の子にたずねてみた。

「あたいはチルノ！ よろしくねー！」

そういう女の子が言った。孝之は、やつぱりチルノだったかと思いながら、チルノに頼みごとをしてみた。

「チルノもしよかつたら紅い館のところに知つているなら案内してくれないかな？」

チルノは餡子入り饅頭を食べながら言った。

「いいよーー！ あたい紅い館なら知つてるから案内してあげるー！」

「元に餡子をつけながら大きな声で言つた。その姿を見てカワイイ！ なんて思ったの孝之だけの秘密であった。」

現在。

「やつとつこたか」

やつとつこたかと紅魔館についた。館の色は紅く、田に悪いとそう孝之は思つた。

「ここのが紅い館だよ！ あたいしたら優しいー！」

それだったら早く背中から降りてくれと、思つたが、チルノの笑顔で別に降りてもらわなくともいいか、そう孝之は思つたのだ。

「しかしまあ、とっても紅いな、チルノ」

孝之はチルノに言った。

「そうだね、紅いね～」

チルノもそう言った。どうも田に悪い感じがする。

「それじゃあ行きますかー！」

孝之はさう言って紅魔館の門番のところへ行つた。

これで一番に…そして、カルノとの出会い。（後書き）

いやねえ、深夜に書くなんてダメだな～

たぶん誤字とかが多いと思いますし、そのつま編集すると困ります。

感想とかアドバイスまたは批判などなどお待ちしております。

編集してみた

突撃！隣の……！（前書き）

アリスの家に泊まる。

暇なので一人でお出かけ。

チルノに出会う。

饅頭をあげたら、ちょっとだけ仲良くなれた。

紅魔館に続く道を案内してもらひ。

紅魔館に到着。

安 先生……チルノが乗ってる背中が冷たいです。（ブワッ）

誰か文才をください。

以上です。

突撃！隣の……！

するどい風を切る音が聞こえた。銀色の閃光がチルノと孝之の顔の真横を通り、髪の毛が数髪舞つた。後ろに振り返る、そこには宝石のように光り輝く銀色の髪を風でなびかせるメイド服を着たきれいな女の子がいた。

ズブリッと後ろから嫌な音が響くまるで肉に何かが刺さる音だつた。ドサッと音がする、孝之は振り向く先ほどまで眠っていた赤い髪の女性が銀色のナイフに貫かれ体から血を流し倒れていた。

その光景に、背筋がゾツとした。チルノは何が起きているのか把握できていらしく、え？ 何が起きたの？ そういう顔で、孝之の顔を見ている。

ジャリッと音がした。先ほどの銀髪の女の子がコチラに一步、また一步と歩み寄ってくる。孝之は動かない、孝之もチルノと同じで、何が起きたのか、把握しきれていないのだ。

とうとう距離が1メートルぐらいになる、その女の子は、倒れる女性を一瞥したあと、コチラに顔を向けて言った。

「ようこそ紅魔館へ、お嬢様があなたを歓迎しております」

一歩一歩歩いていく、スグそこには紅魔館がある、背中にはチルノがいる、とにかく前へ進む、ルビーのように赤い髪の女性が立っていた、孝之は、門の近くに立つてゐる人が紅 美鈴なのかな？ 紅美鈴なら、こちらの目的がはたせるんだけど、そんな事を考えながら、話しかける。

「すいませーん」

声を掛けてみる。何故か反応がない。もつ一度孝之は声を掛けてみた。

「あのー。すいませーん」

反応がない。

「おかしいな」

孝之はどうしたらいいのか考えようとしたが。

「孝之ー。」

チルノは大きめな声で孝之の名前を呼ぶ、少々耳がキーンとしたが、気付かず、聞いた。

「ビツしたの?..」

孝之は言った。

「あの変な服を着ている妖怪、寝てるよー!」

そう大きな声で言った。やつぱり耳がキーンとしたが、チルノが言つてゐる事がホントなのか、よく見てみる。

「スーパー、スーパー」

じつせん壁に寝てこるようだ。立つて寝るなんて凄い特技だなと黙つ、ハーネスに涎まで出でている。

「チルノありがとう」

孝之は女性が寝ている事を教えてくれたチルノにお礼を言つた。

チルノは少々照れた感じで、えへへへと笑つた。そんなチルノを見て癒されながら、どうやって、眠っている女性がどうやって起きるのか考えようとした時にそれは起つた。

何かに見られるよう感覚がした。何かとてつもない何かに見られるような感覚。辺りをぱっと見る、だが、なにもいなく、いるとしたらならば、居眠りをしている女性だけだった。だが、その感覚が消えてくれない、もう一度だけ辺りを見てみる。

「こ」をみても誰もいない、なのにこの嫌な感覚が消えてくれなかつた。孝之は氣のせいだ、そう思い込みつつ寝ている女性にむか一度話しかけようと思つて近づきつとした。

そして現在。

「え？」

孝之は声を上げた。田の前では銀髪の女の子が、コチラを見ながら、話しかけてくる。

「私についてきてください。」案内します」

そう言つて銀髪の女の子は、紅魔館の中に入つていこうとした。孝之は銀髪の女の子を呼び止める。あのナイフが刺さった女性は大丈夫なのかと聞く。

「心配いりません」

その言葉を聞き何処か如何、心配ないのかが気になつたが、ここにいても仕方がないので銀髪の女の子についていくことにしたのだがチルノはどうやら中に入れてももらえないらしくしようがないので、チルノにここで今日はさよならしようと言つた。チルノは首を横に振りなかなか降りてくれなかつたが、また一緒に遊ぼうと約束したら降りて帰つていき孝之は銀髪の女の子についていった。

孝之は気づかなかつた。紅魔館に入つていく姿を、謎の金髪の女に見られていることに、その女は、田傘を持ち扇みたいなので口元を隠しつつ、その姿を消した。

紅魔館の中に入つて、銀髪の女の子についていく、銀髪の女の子にもう一度あの女性は大丈夫なのかと聞いてみたら。

「あの門番は妖怪ですので、心配しなくても大丈夫ですよ」

銀髪の女の子がそう言った。孝之はやういえば、チルノもそんな「」とを言っていたような感じがする。やう思ひ出していた。

孝之があの倒れた女性の名前を聞いてみると。

「あの門番は紅 美鈴と言います」

「どうやら紅 美鈴であつてたらしく紅魔館から出たら目的を達成されよう」と決意する。

適当に自己紹介をして、その銀髪の女の子の名前が分かった。銀髪の女の子は十六夜 咲夜と言つりしく、その名前を聞いて少々驚いた。十六夜 咲夜と言えばメイド長で、紅魔館に住む唯一の人間。紅魔館で炊事から洗濯そして戦闘まで一切を仕切る実質的な紅魔館の顔であるような存在だ。

色々と話していたら咲夜が立ち止まつた。どうやら目的地は「」らしい。

「」が、この紅魔館の主である、ニアリ亞・スカーレットお嬢様のお部屋で「」ます」

咲夜はそう言った。

何となく分かる……この扉の向こうには、永遠の紅い幼き月……レニア・スカーレットがいる。この扉の向こうから何かよく分

からない威圧感。咲夜がドアをノックする。肩に力が入り緊張する。

「入りなさい」

扉の向こうから声が聞こえた。ギーっと音がなりながら扉が開く。

「失礼いたします」

咲夜がそう言って中に入り、孝之も失礼しますと言つて部屋の中に入つていった

突撃！隣の……！（後書き）

疲れた……誤字とかあつたらそのうち直します。

感想そしてアドバイスなどシドシお願いします。

何となく考えたシーン（本編とは関係ないです）

もしも咲夜さんが大人だつたら（咲夜さんは本編の設定では10歳です）

咲「（可愛い……おつもちかえりいいい！）

孝「ちょっとまたすけてくれっええええええ！」

その後、咲夜の部屋から孝之が出てくる事はなかつた。

もしもブレイク中だつたら

「リリが、この紅魔館の主である、レミリア・スカーレットお嬢様のお部屋でござります」

咲夜はそう言った。

何となく分かる……この扉の向こうには、永遠の紅い幼き月……
レミリア・スカーレットがいると。この扉の向こうから何かよく分
からない威圧感。咲夜がドアをノックする。肩に力が入り緊張する。

「入りなさい」

扉の向こうから声が聞こえた。

ギ~と音がなりながら扉が開く。

「失礼いたします」

咲夜がそう言って中に入り、孝之も失礼しますと言つて部屋の中
に入つていつた。

そして孝之はみた。

永遠の紅い幼き月の……レミコア・スカーレットの本当の性質を…

「ぎやおーーたべちやうぢーー！」

その後、孝之が紅魔館に来ることはなかつた。

編集してみた。

第5話 目的達成……？（前書き）

色々とありました

第5話 田的達成……？

田の前には椅子に座つて優雅に紅茶を飲む幼女がいた。その幼女は椅子から立ち上がり「ひつ」言つた。

「私の名前はレミリア・スカーレット」

「そうレミリアは言つた。

「あなたの名前は？」

名前を尋ねた。この部屋には孝之と咲夜、そしてレミリアしかいない、咲夜はレミリアの従者、必然的に孝之に聞いてることになる。孝之は緊張しながら言つた。

「俺の名前は飯野孝之、孝之と呼んでください」

あまりにも緊張してしまい舌を噛んでしまう。恥ずかしくなり顔を下に向ける孝之。その姿を見ていた咲夜とレミリアはクスクスと笑つてしまつ。

「分かったわ、孝之と呼ぶことにするわ

レミリアは口元に手を当てながら言った。孝之はどうも恥ずかしく未だに顔を上げられないでいた。レミリアは孝之に言った。

「顔を上げなさいた、孝之、」

レミリアは手招きをしながら咲夜をチラッと見た、その視線に気づいた咲夜はその場から消えた。そして、孝之はレミリアに言われたとおり近づく、レミリアの目の前まで近づく、するとレミリアは孝之に近づいた。あと一歩ほど歩けば顔と顔が接触するぐらにまで近づく、孝之は少し頬を染めて顔を下に向け、緊張する。

「ねえ孝之」

レミリアの手が孝之の頬に触れられる、恥ずかしいくなる。だが顔をあげレミリアの顔を見た瞬間、背筋が凍る。何で背筋が凍つたのかが一瞬で分かった。恐怖だ。

「孝之」

レミリアはもう一度孝之の名前を呼ぶ、孝之は返事をいない、否、返事ができないのだ。最大級の恐怖が目の前にいる。妖怪に襲われて死にそうなった時の恐怖心よりも勝る、今のレミリアが何かを喋

ると何故か動けなくなる。田と田が合つ、レミリアの目は紅く目を逸らせない、こんな事態に陥っているのに、レミリアの目はきれいだなと思った。心臓の音が聞こえる。バツクンバツクンと音が鳴っているのが分かる、ゴクリ、唾を飲み込む音が聞こえる、孝之は知らず知らずのうちに唾を飲み込んでいたらしい、レミリアが視線をはずし孝之の首筋に視線を落とす。瞬間、頭に最大級の警報が鳴る。

「やめひー。」

声を出す、声を出せれた事を奇跡といえるだひつ。孝之は2歩3歩と後ろに下がる。

「ついた！」

4歩目、下がろうとしたのだが足をもつらせてしまい、後頭部を強打する。「じろじろ」と後頭部を抑えながら転がる。近くに合った椅子に今度は額をぶつけてしまい、額を押さえる。その姿を見たレミリアは爆笑した。

「プツー。」

レミリアの肩が震えている、笑いを堪えているのだひつ、だが我慢できなかつたのだろう、アハハハハハとレミリアは笑い始めあ。笑いを提供している孝之本人は笑えない。もしも違う人が同じ事を

したならば孝之も笑うだろ」。

「べつに笑わなくたっていいじゃないですか」

孝之は頭を手で押さえながら涙目になりながら言った。

「アハハハハハ、だつてあなた面白いんですね」

孝之はガックリと肩を落としレミリアが笑い終わるのを待った。

「あ～、面白かったわ」

レミリアは一頃り笑った後、そう呟いた。

「それで孝之、ちょっと聞いていいかしら」

レミリアが問う。

「あなたは何故、紅魔館に来たのかしら」

「えつとれのね」

「どうやらレミコアは孝之が紅魔館に訪れた理由を聞きたいようだ。レミコアに聞かれて紅魔館にきた理由を思い出す。

孝之はなんて答えるかと考える、門番の美鈴に会ってきました。そんな事を言えない。実は孝之は美鈴と仲良くるところ目的があつたのだが、目的が変わった、いや、目的は完璧に達成したといって良いだろう。美鈴と仲良くなり、ちょっとずつ紅魔館の住人と仲良くなる。それが孝之の真の目的であった。

紅魔館の主であるレミコアとは少しだけ仲良くなれたと思う、レミリアと仲良くなったら自然と紅魔館の住人と仲良くなれるだろう。孝之はそう思いつつ、適当に道に迷つたと嘘をついた。チルノはあのでつかい湖で仲良くなり色んなところを案内してもらっていたと言つたら信じてくれた。

すぐに信じてくれたレミリアに心が痛んだ。友達じゃないまでも、ある程度仲良くなつたと思つていてる。そんなレミコアに嘘をつくのは少々心が痛む、そう孝之は感じた。

それから孝之とレミコアはお喋りをした。

「あら、夜になっちゃつてるわね」

レニアが心配した。

「夜…だつて…？」

孝之は思わずタメ口で聞を返してしまつ。

「ええ夜になつたるわ」

孝之は外を見る。暗い、とっても暗くなつていた。そして孝之はヤバイと思った。血の気が引く、アリストの説教はこつ酷く長い、とにかく長く、短くて1時間で長くて3時間ぐらい説教される。

「いのちレニアさん、俺帰るねー」

孝之は慌てて椅子から立ち上がり、レニコアの部屋から出ようとした。

「孝之、待ちなさい」

レニアが引き止める、孝之は急いで帰らなことやせんで早口でレニアにせりしたのと問いつ。

「あなた、今日は「」で泊まつていきました。その魔法使いには咲夜が今日は「」で泊まると説明させておくから」

先ほどお喋りしていた時に、レミコアの口からアリスの話題が出たのだ。孝之は少々驚きながらも、レミリアにアリスはお友達で今自分がアリスの家に泊まりにきてる事を告げていた。

「咲夜」

レミリアが咲夜と呟く。

「お呼びじょうか、お嬢様」

イキナリ目の前に現れてレミコアに呼んだかと問う。

「ええ、呼んだわ」

そこからレミコア達の行動は早かった。咲夜をアリスの家に行かせて泊まらせる事を説明させ、孝之が眠る密室を用意する。ホントに早かった。そして1日が過ぎた。

第5話　目的達成……？（後書き）

ダメだ……ぐだぐだだ。

途中から完璧にネタ切れ、その場その場で考えてました。
そのうちこの話は編集します。

このような駄作ですが頑張つて完結させようと思います。
激しい批判とアドバイスお待ちしております。

編集した。

孝之には年の離れた人間の友達がいる。

名前は最上利昭。（もがみとしあき）最初の出会いは最悪だった。

同じ年の友達と鬼ごっこをしていて孝之が少し余所見をして走っていたら利昭の男のシンボルに顔が当たり、利昭は余りの痛さに悶絶していたりする。孝之は孝之で顔に当たったのが男のシンボルだという事に気づくとオーヘーヘー言い出す。本当に最悪だったのだが、何故か仲良くなつた。

孝之はため息をつく、その理由はすぐ隣にいる利昭のせいであつた。

「たくよおー！ 雪のやつ……どうして俺の気持ちを分かつてくれないんだー！」

何故か利昭の家で自棄酒につき合わされている。孝之は子供などで御茶なのだが。

「少しへりこ……俺の気持ちを分かつてくれよー。」

「ダンジー、升瓶を地面に強く置く音が辺りに響いた。

「なあ、孝之もやう思つだらう。」

「ああ、すこしうつとうこと思つがしようがない、とりあえず落ち着けと言つておき、何故こんなに利昭が荒れたのかを孝之は思い出す、利昭には幼馴染がいる。名前は文野 雪花屋ふみのゆきでアルバイトをしているらしい。とりあえず、何でも利昭は小さい頃から雪に惚れていで何回アプローチしても気がついてもらえず、今日思い切つて告白したらしいのだが、あつたうと玉砕といつより勘違いされたらしい。告白した時の言葉が確か。

「俺のためにずっと味噌汁を作つてくれないか！」

利昭がそう言つたら、雪がこいつ言われたらしいのだ。

「何言つてゐの？ 利昭にこつとも朝じはん作つてあげてるじゃないの？」

それでそういう言われて落ち込んでいたらしく、孝之は落ち込んでいふとほしゃずに利昭を見つけて、現在に至ると。

「利昭さ、少し告白の仕方間違えたんじゃない？」

孝之はそういう言ひながら御茶を飲む、せびよこ温めの御茶はおこじ
こと感じながら、利昭の言葉を待つ。

「間違えたつて、何が間違えたつて言つんだよー。」

少々声を荒げて言ひ、お酒を飲んで少々キレやすくなつてゐるよ
うだ。

「だつてな、雪さんがいつも味噌汁を作ってくれるんでしょう?」

利昭は頷きながら作ってくれると言つた。利昭は一人暮らしで朝
早く起かるのが苦手らしく、いつも雪に起こして朝じはんを作つて
もらつてゐらし。

「それつて、雪さんには、いつ聞いえたんじやないの?」

利昭は黙つて孝之の言葉を聞く。

「朝起きるの苦手だから、これからもずっと朝飯を作りこきてほし
い」

雪にせりつけられたはずだと、孝之は利昭に言った。利昭はなるほどなるせびと領をながら言った。

「確かに、あの鈍感な雪ならありえるかもな」

「つなずく利昭の言葉に孝之は雪さんって鈍感なのかよ！ と心中で言つ、とりあえず孝之は利昭に雪さんに想いを伝えるかもしれない提案をしてみる。

「利昭、俺に提案がある。たぶんだけど、これで雪さんにも思いが伝わるはずだ」

利昭は期待の表情でこいつを見ていた。とつあえず孝之は言つてみた。

「とつあえず利昭、お前、今いくら持つてる」

利昭にお金をどれだけ持っているか聞いてみた。

「お金か……少し待つてくれ」

やつはつた利路は「パン」パンと押入れの中を探す。

4分後

「あ～あつたあつた、えつと、45貫ぐらいかな？」

孝之は利路がそんなにお金を持つていて驚いたが、先ほどの話を始める。

「どうあれ、ピンク色の胡蝶蘭を買え」

孝之はやつはつた。今は夏だから花屋で胡蝶蘭ぐらう焼つてこりだらうと孝之は考へる。

「パン カラーン、なんだそれ？」

どうあれ孝之は説明する。

「言い方が変だぞ、胡蝶蘭だ。胡蝶蘭は花だ、胡蝶蘭の花言葉を分かるか？」

孝之は言った。利昭にさつき知つた胡蝶蘭の花言葉なんて分かるはずもなく、分からないと利昭は言った。

「よく聞け、ピンク色の胡蝶蘭の花言葉は、あなたを愛します。だ」

その言葉を聞いた利昭は顔が赤くなる、見てるじつが恥ずかしいほど赤くなり、とにかく孝之は言った。

「雪さんって花屋で働いてるんだろ？ とりあえず、雪さんの休日にでも花屋に行つてピンクの胡蝶蘭を買つんだ」

孝之は言葉を続ける。

「それから、胡蝶蘭がなかつた場合、カーネーションを買え、色は赤かピンクだ、黄色と濃赤はダメだと白も、買った後は適当に呼び出して告白したらいいと思う、告白のセリフは自分で考える、そして最後に一つ、当たつて碎けんだ。ついでお前の家のお茶の葉は全て貰つていへ」

孝之は一やつと笑いながら御茶を飲む、利昭は孝之を呆然と見て

いた。
。

当日

利昭は緊張していた。とりあえず胡蝶蘭は買ったのだが、告白するためのセリフがまだ考えられてない。どうしようどうしよう、そういう思いながらも、今か今かと雪を待つ。今の利昭には1分が1時間ぐらいに感じ取れるであろう。タツタツタツタツと音がして前を見た。走ってこちらに近づいてくる一人の女性。雪だった。着物を着て「チラに手を振つてくる。

「利昭ー！」

大きな声で利昭を呼んだ。その声を聞いてドキッとする。雪の声をきくだけでこんなにドキドキするなんて相当雪が好きなんだなと思った。

雪が近づいてきて、利昭に聞いた。

「どうしたの、いきなり呼び出すなんて、何かあったの？」

雪に聴かれた瞬間、利昭は心臓が飛び出そうになる、頭の中が真っ白になった。何を言つのか考えていたはずの言葉を全て忘れてしまった。

利昭は焦つてしまい無言で手に持っていた胡蝶蘭を前に差し出した。利昭はしまった。そう思つてしまつた。

雪は無言でその花を見る。利昭は怖くなつた。雪は何も言わず無言で花を見ている。せめて反応があれば何か言えるのだが、腹を括り雪に声をかけようとした。

「この花を……わたしに？」

利昭が言葉を発するよりも先に、雪が発した。利昭は首を縦に振つた。

「花言葉……知つてゐるの？」

「氣のせいか、雪の声は震えている、そつ利昭は思った。

「あなたを愛します」

花言葉だけを利昭が言つた。胡蝶蘭の花言葉はあなたを愛します。その言葉がそのまま告白に繋がつた。

「告白……なの？」

利昭は彼女の目を見ながら言った。

「告白だ」

そう言つた、後はただただ雪の返事を聞くため黙つた。利昭はそれ以上喋らない、そして、雪が言つた。

「告白なら、返事しないとね」

利昭は聞く、心臓の音がスゴクひるつい、唾の飲み込む音も聞こえる。たつた1秒が遅く感じる。思わず目を閉じてしまつ、怖くてたまらない、振られたらどうするんだ、振られるに決まつてゐる、そんな嫌な事ばかり考えてしまつ、10秒または1分ほどだろうか、時間が分からぬ、利昭は目を開いた。そこには涙を流しながら口を開く雪の姿があつた。

「わたしは、利昭のことが……」

風が駆け抜け胡蝶蘭の花が一枚舞つた。

その日、幻想卿に新たな一組のカップルができたのである。

外伝1 友のために助言（オリキャラが2名登場します）

本編では出ない予定はあります

なんとなく書いてみた。

後悔はしてるが公開はする。

雪の髪の色は黒

あとは想像にお任せします

利昭の髪の色は茶髪

あとは想像にお任せします

はあ～ かよ（前書き）

紅魔館に泊まりました

そしてこの話は色々と挑戦してみた。

はあー

かよ

紅魔館に泊まつてから数ヶ月たつた。

紅魔館の住人達とは仲良くできて、特に仲が良くなつたのは美鈴だつた。

孝之が紅魔館に遊びに行つたら必ずと言つていよいほゞ美鈴と話をす。おもに世間話と美鈴の愚痴であるが。

孝之は家にいた

「つまんないな」

咳きため息をはきながら布団の上で、ゴロゴロする。

「まじですることないな」

足をバタつかせてから何かを思い出す。

そういえば、今日はアリスさんに家に泊まりきなさいって言われて泊まりに行くんだっけな。孝之は思い出しお守りと人形の準備しようとした。

「孝之、何独り言をブツブツ言つてるの？ 嘘!! ほんできたわよー」
母親の麻衣に声をかけられる、いきなり声をかけられ驚く、部屋の襖が開く音はしなかつたはずなのに、何故か部屋にいるところ、我が母君ながら末恐ろしい、アホな事を考えながら返事をする。

「はーい」

返事をしてから立ち上がり、飯を食いにいく。

食卓には初春と麻衣がいて、すでに座つている。

「孝之、早く座りなさい」

父親の初春が急かす、そんなに腹が減つてゐるのかと思い、席に座る。

「それじゃあ、手を合わせて、いただきますー」

麻衣のその言葉と同時に初春と孝之が「いただきまーす」と言つた。

「ひや、冷や蕎麦のようだった。

よくまあ寒いのに作るなあ、そう思ひながらも蕎麦をズルズルと食べる。

「母さん、美味しいよ」

孝之がそう言つと麻衣は微笑みながら蕎麦を食べる。

麻衣は口いっぱいに蕎麦を入れる。その様子は宛らそれはハムスターのようだつた。

「母さん、ちよつとはしたないよ、ゆっくり噛んで食べようよ」

孝之はそう言つた後、熱いお茶を飲む、そつ指摘された麻衣はすこし落ち着き噛んで食べる。

「う~、いいじゃない、ぐつに減るもんじゃないけど、やつ言こながら

麻衣が言つた。確かに減るもんじゃないけど、やつ言こながら蕎麦を食べる。

「うそつきました」

初春がそう言つた。孝之もちよつと食べ終わつたので御茶をすすりながら言つた。

「うそつきました！」

麻衣はまだ蕎麦を食べてゐるようで、口をもぐもぐせながら急いで食べてゐる。孝之は麻衣と初春に言つた

「父さん母さん、アリスさんの家に泊まりに行く約束してたから行つてくるねー！」

孝之は言つた。初春は苦笑いしながら言つた

「アリスさんに迷惑かけるなよー」

「いつぺらつちやーい」（いつぺらつちやーい）

初春と麻衣が言つた。

「いつときまーす！」

孝之はやつと言つながら、手ぶらで家を出た。

「ふああ～」

欠伸をしながら魔法の森の中に入る。

最初の頃はびくびくしながら通つたものだな、それにアリスさんの家まで結構遠いんだよなあ、内心そう咳きながらアリスの家に向かう。

「そういえば森の入り口に何か店みたいなのがあったよな」「何か色々なものを置いてたし面白そうなものがありそうだな、孝之の勘がそう告げる。

「ん？」

孝之はとある事に気づいた。

「あれ……人形とお守り持つてきてない？」

慌ててポケットなど色々なところを探す。

孝之は冷静に目を閉じ考えとある決断をする。

「家に取りに戻ろうか、地図も忘れてるっぽいし」

孝之は最初の道のりなら暗記しているのだが、途中からは完璧に覚えてなく、今気づいてよかつた、知らないうちに行つてたら死んでたな、そう思つた。

とりあえず一度家に帰ろうと後ろに振り向く。

何が起きたのか分からなかつた。

後ろに振り向いたとたん突然尻に鋭い痛みが走つたのだ。
振り返つてみる。

そこには“きもけーね”と化した寺子屋の先生がいたのだから。

「なんでけーね先生が~」「
とりあえず。

「ちょ w なん w で w

とりあえず尻を押さえながら走る。

いつたになにが起きているのか分からないうが、とにかく走る事だけを考える孝之。

人里が見える。

走り走つて人里に入る。

「ついてきてない……よな?」

後ろを見てついてきてないか調べる。

「助かつた……」

ふうっとため息をはき前を見る。

前を見た瞬間、孝之の体は硬直する。

「はつ?」

そこには袴姿でこちらを漢達がいた。

その漢達が、やらないかと叫びながら突っ込んできたのだ。

「ちょ w おま w 待て w 何が起こつて いるのか 説明を w アッ――

――!」

「アッ――――――!」

飛び起きる。息が荒い、とりあえず深呼吸をする。
だいぶ落ちきはじめた。

「ふうー、夢オチかよ」

とりあえず孝之は額の汗を拭い布団をかぶり寝た。

はー　かよ（後書き）

泣かうとおもいましたが、どんな駄作でも完結させる事に意味があると、誰かが言つたので、とりあえず後半を書き直しました。

主人公設定あとの他（上白沢慧音と妹紅の言葉使いとか更新）（前書き）

本編で東方キャラが主人公に思つてていることの

慧音と妹紅を更新

主人公設定あとその他（上白沢慧音と妹紅の言葉使いとか更新）

飯野孝之いいのたかゆき 7歳

種族：人間？

身長 133cm
体重 30k

7歳児だけど身長体重が大きめ

主人公の外見は……目は微妙に目つきが鋭い 糸目という設定があつたが、力つと見開くと世界が滅びるという裏設定があつたのでボツ

瞳の色は 濃褐色

髪の色は 黒

髪型 ロックテイストクールウルフ

体の色は 日本人と同じ感じの肌色

今のところこれぐらいしか考えてない。

東方の知識

東方紅魔郷ぐらいしか知らない。（作者はキャラとかなら大体知つてはいるが、口調そして性格などは余り知らない あと関係ないが作者は東方紅魔郷しかプレイした事がない）

性格・特徴

けつこう頑張りやで女性と子供に意外と優しいのだが、ヤローに関しては優しくない（だがホントに困っていたりしたら優しくな

り助けたりするかも）

何かが起こるとすぐに対応できるが、予想外な事が起こるとめつちや混乱する事あり。

友達は多いほうだが友達とはあまり遊ばない。
いちおー寺子屋に通つたりするで慧音とは知り合い。よくサボるので慧音に頭突きをされる回数がダントツ1位。

主人公は勘が鋭くよく当たる。

そして回復力が尋常じやないぐらい早い。

主人公は魔法を使うためアリスに黙つて魔法の勉強中（じつはバレバレだつたりもする）そのうち美鈴に弟子入りの（予定）あとできたらパチュリーとアリスにも弟子入りさせられたらさせたい（予定）

能力紹介

努力すればどんな力でも手に入れる程度の能力

その名のとおり努力をすればどんな力でも手に入る。

魔法を覚えるたり色々とすることができる。

じつさいには、それ相応の努力をしないと手に入らない。

運命を操る程度の能力とか時間を操る程度の能力とかを完璧に覚えるには400～500年ぐらい努力しないと無理。

比較的に覚えやすい程度の能力は、魔法を扱う程度の能力とか気を使う程度の能力とかである。

だが誰かに師事すれば大幅に覚えるのが早くなる。

師事する人が多ければ多いほど早くなる。

老いる事も死ぬ事も無い程度の能力は努力しても無理、なぜなら薬を飲まないと覚えられないから。

程度の能力の習得情報

? 魔法を使う程度の能力 （扱う程度の能力） 今のところ努力
しだいで、あと4年と10ヶ月で完璧に習得できる （主人公は一
回だけ魔法を試そうと頑張ってみた結果 上手くいかず頭の髪の毛
が燃えた まだ自由に扱う事はできない）
? 人形操る程度の能力 魔力を自由自在に扱えるようになるま
で話にならない。

? 気を使う程度の能力 （覚えさせる予定）

本編で東方キャラが主人公に思つてゐること

アリスマーダトロイド・仲良しだが恋愛感情の類は皆無
チルノ・友達と思つてゐるらしい 孝之の背はチルノの特等席
レミリア・スカーレット・面白い人間だと思つてゐる反面、血を
吸つてみたいとも思つてゐるが、もしかしたら母性本能に目覚め……

十六夜 咲夜・弟ができたみたいに思つてゐる

上白沢 慧音・何かフラグがたつてゐる？

藤原 妹紅・意外と楽しいやつ

上白沢 慧音の言葉使いについて。

上白沢 慧音の言葉使いは寺子屋で居るときは少しばかり男口調
になる。

寺子屋以外のところだと女口調になる。 （寺子屋が教えが終わ
つたら女口調になるが、やっぱり親しくならないと女口調にならな
い）

藤原 妹紅

俺の小説では妹紅は女口調です。

本編年表 微妙にネタバレ？

1989年	2月3日	十六夜	咲夜	生誕
1990年	7月4日	博麗	靈夢	生誕
1992年	11月5日	霧雨	魔理沙	生誕
1995年	5月20日	飯野	孝之	生誕
1998年	12月7日	レミリア・スカーレット	スカーレット	に拾われる（ このとき咲夜、両親がおらず孤児になつて いる）
1999年	8月26日	飯野孝之	攫われる	
2000年	8月27日	アリスマーダトロイド	に出会い。	
2001年	8月28日	孝之	無事に生還する	
2003年	9月31日	チルノ	と紅魔館の住人	に出会い。
2003年	3月4日	美鈴	に弟子入りする。（予定）	
2003年	10月3日	霧雨	魔理沙	が霧雨家から勘当される
2003年	5月4日	博麗	靈夢	がスペルカードルール制定を導入する
2003年	8月1日	紅い妖霧	発生	
	8月12日	紅霧異変	発生（東方紅魔郷）	

主人公設定あとその他（上白沢慧音と妹紅の言葉使いとか更新）（後書き）

東風谷 早苗って女子高生なのかな？ 全然わからないから本編年表にかけれない。

東方wikiを見て靈夢達の年齢とかを予想してみたんだが……全然わからない。

努力とは？（前書き）

今日は行間に気をつけてみた。
たぶん見やすくなつてゐるはず。

努力とは？

“努力をしよう”

目が覚めたと同時に寺子屋の誰かから頭突きを食らつた、とても痛かった、痛かったのだが、いきなりそんな言葉が頭に浮かんだ。何故“努力をしよう”と浮かんだのか、何故か知らないが努力をしたほうが良いと、頭の中の何かが告げているのだろう。

そしてまた額が痛くなつた。痛みがだんだんと額に広がつていき悶絶してしまう。痛すぎて立ち上がりがれなくなる、どうやら頭突きをした女性も額を押さえながら唸つっている。

「慧音先生……痛いですよ」

額を押さえながら孝之は言った、頭突きをした女性、上白沢 慧音が額を押さえ涙目で何か言おうとしている。

「いい加減に授業をしろー もうきから寝てばかりで私の授業を聞けないのか？」

「慧音先生、あれですよあれ、睡眠学習ですよ」

「屁理屈を言つた屁理屈をー！」

「まあまあ、ちゃんと田が覚めましたので授業を始めましょうよ」

慧音は額を押さえ、ふりふりと怒りながら授業を再開する、少々機嫌が悪そうだ。やはり先ほど睡眠学習発言のせいだらうか。そんな事を考えながら慧音の話を聞くは孝之は考える。

どうしたら強くなれるのかを、転生する前に神様が言っていた事を思い出す。“努力すればどんな力でも手に入れる程度の能力”そんな事を言つていて。努力をすればどんな力でも手に入る。努力とは何をすればいいのだろうか、全然分からぬ、努力をすればどんな力でも手に入る、努力すればするほど強くなるって事だろう。上限はあるのだろうかと考へる、もしも上限がなければ、我武者羅に体を鍛え我武者羅に魔法を覚え我武者羅に探求していけばどんな妖怪でも一瞬で倒せるぐらいの力が手に入るのだろうか、けど無闇に今は努力しても意味がない感じがした。色々な考えが頭に浮かぶ。

「そおい！」

何か凄く額が痛い。そう言えば先ほど同じような事があつたなと孝之は思つた。

「慧音先生、額が痛くならないですか？」

「痛いに決まってる」

「ならどうして頭突きをしたんですか？」

「話しかけても一向に気づかないから」

額を押さえ言われる、びつやけ声をかけられてたらしく、それに気づかない孝之にしようとがなく頭突きをしたという事らしい。

「慧音先生、それで何か用ですか？」

孝之は尋ねる。

「いや、もうとっくに授業は終わっているのに、孝之が一向に帰ろうとしてなかつたから、周りを見て、誰も居ないでしょう？ それで少し心配したのよ。何か悩みがあるなら相談に乗るよ？」

慧音は優しく微笑みそう言つてくれた。びつやら何か悩みがあるように見えてたらしい。周りを見てみると誰も居ない、それに少しだけ薄暗くなつてきている。どれだけ考えてたんだろうが、とりあ

えず孝之は『氣のせこだと書ひておくれ』にした。

「悩み事なんてありますよ、」この年頃で悩み事があつたら将来禿げますよ」

『面白がりに書つてある。あると慧音は髪をかきあげる仕草をした。少しだけドキッとしたのは孝之だけの秘密だ。

「孝之はホントに大人びてる。私がそれぐらいの頃は結構やんちゃだったのに」

慧音はそう言つ、大人びてると言われてもねえ、これでも22歳ですからー そんな事を思つ。それよりも質問したい事があるので孝之は質問していいかと聞く。

「慧音先生、質問していいですか?」

「いいよ、私が答えられる質問なら答えてあげる」

『やうやく聞こへしや孝之は質問する。

「じゃあ先生、どうすれば努力はできますか?」

「どうすれば努力ができるか……ね」

慧音は黙り込む、なんて答えたらしいのか迷っているのかな？そんなことを思いながら慧音が喋るまでこちらは黙る。外の様子が気になる見てみると、気づけば外は夜になっていた。これは帰つたら説教されるかなと孝之は思つていた。

そして慧音が口を開く。

「難しい事は言えないけど、目標を見つけてみたらどうだろ？」

「目標ですか？」

「そう、私が思うに、人は目標があれば努力ができると思う。それに、孝之にはまだ分からないとと思うけど、努力しても成功するとは限らないんだ。けど、成功した人は必ず努力しているんだよ、私も努力している、孝之には目標を持つて努力をしてほしいと私は願うよ」

綺麗な笑顔でそう言った。少しだけドキッとする。とりあえず分かった。ような感じがする。目標を持てば頑張つて努力ができるという意味だろう。

「慧音先生、答えてくれてありがと「わ」わこまく

「いや、当然のこととしたまでだよ、別に礼なんてしなくていい

慧音はやう言つながら孝之の頭をなでられた。少々照れくさくなつてしまつ。孝之は頬を染めながら帰る準備をする。

「わい、帰りますか

「私も帰るから、家まで送るよ」

慧音も帰る準備をし一緒に帰るつとこつてくれる。孝之は何故か慧音を見るとドキドキと心臓の鼓動が早まるのを感じていた。慧音が右手の手を差し出してきた。手を握つて歩こうと誘つてくれてるらしく、孝之の顔が何故か真つ赤になつた。真つ赤の音が凄くドキドキしてるのが分かる、孝之は慧音の手をギュッと握つて家に帰つていつた。

努力とは？（後書き）

できたてほやほやです。

1日1回は最新作を出すと心に決めていますが。

超展開になつていらやもしれません。

そのうち何回も編集したり話を消したりするかも。

感想とアドバイスあと批判などくださいです。

とりあえずまだまだ完結はしませんが、完結は絶対にさせます。

完結させる事に意味があるのでから！

ボツ案集

「そうだ、私が思うにだ、人は目標があれば努力ができると思う。それに、孝之にはまだ分からぬと思うが、努力しても成功することは限らないんだ。けど、成功した人は必ず努力しているんだよ、私も努力している、孝之には目標を持つて努力をしてほしいと私は願うよ」

「先生が努力を？ どんな努力をしてるのですか？」

「ああ、孝之、キミをどうやって私の突符「ハリケーンミキサー」

で掘るか考えていたところなんだ

「えつ？」

孝之はその場で回れ右をし走ろうとしたが肩をつかまれ走り去る事ができない。振り向く、すると何故かハクタク化した“きもけーね”がういた。

「ああ、食らうがいい！」

突符「ハリケーンミキサー」

「ちよ wアツ-----！」

人里中に広がった。その後、孝之とけーねは結婚したといふ。

慧音の家に……作者の知識があれなので慧音と妹紅がオリキヤラみたいになつて

妹紅と慧音の言葉遣いが分かりません。

慧音の家に……作者の知識があれなので慧音と妹紅がオリキャラみたいになつて

「きつ～つぅ！ れえい！ お疲れ様でしたあ！」

寺子屋の授業が終わり皆楽しそうに帰つていぐ、孝之は椅子に座つたまま帰つていぐ子供達を眺めながら考え方をしていた

（今日から一週間、一人暮らししか……少しめんどうだな）

流行り病で両親が体調を崩してしまい近くの病院に入院する事になつたのだ。両親が退院するまで孝之は一人暮らしをすることになる。

飯を如何するか……家のお金は勝手に使えないしかと言つて使わずに飯を食わないわけにはいかない、本当に困り果てていた孝之はある事を思いつく。

“泊り”だつた。泊りだつたらお金を使わずに飯を食べれるから一石二鳥なのだが、泊まらせてくれるかどうかである。

（とりあえずアリスさんの家に理由を言つて泊まらせてもらえるかどうか聞いてみよう、無理だつたらミニアさんに理由を言つて泊まらせてもらえるかどうか交渉しよう。ダメだつたらプチ一人暮らしきはじめよう）

孝之は深いため息をついてしまう。

「はあ～」

「孝之、どうしたんだ？ 帰らないのか？」

慧音が話しかけてきた。孝之は深いため息をつきながら慧音に言つた。

「ちよつとした事を考へてしましね」

「ちよつとしたこと？」

慧音は首を傾げる。とつあえず孝之は慧音に話す。

「慧音先生、明日から一週間ほど寺子屋を休みます」

「寺子屋に来ないのか？ 何があったのか？」

慧音は驚き何か理由があるのかと孝之に聞いてくる。孝之は少々めんどくせこと思いながらも訳を説く

「あれです、今日から数日間せど家に父をと母をがいないので、少し遠いところに住んでいる友達のところに泊まりせてもうつかと思つたのです、だから先ほど慧音先生に休ませて貰いたいと言つたんですよ」

「なるほど、それで休ませて貰つたのか。だがダメだ」

「えつー。」

孝巳は少しショックを受ける、慧音だつたらいいぞと呟いてくれると思つていたからだ。孝巳はとりあえず考へないとなー、と思ひながら考へよつとする。

「やのかわりにだが、私の家に両親が帰つてくるまで泊まつにきたりだ？」

「へつ?」

孝巳は一度聞を返す。

「やつこお願こします。どつも聞を逃しかやつて

「しょうがなにやつだな、だから私の家に泊まらないかと聞いたんだが」「だが」

どうやら慧音は泊まらないかと言つてくれてるらしく孝之にした
ら嬉しい事なのだが少々気になる事があつたの聞いた。

「慧音先生の家で泊まらせてくれるんですか?」

「そうだが、ああ、それと今私の友人が泊まりにきているんだが、
それでもいいか?」

「なるほどなるほど、別にいいですよ、泊めてもうるさいのだから文
句なんてありませんよ」

「そうかそうか」

「それでですね、やつぱり寺子屋に行かないといふ……」

「ダメに決まっているだろ?」

「チツ」

「ハハハ… 今舌打ちしたなー。」

「いえ、全然そんな事はしてませんよ」

じつやう寺子屋にはちやんと通わないけどダメらしく、慧音の家に泊まる事は嬉しいのだが寺子屋に通うといつのが少し嫌だった。要するにサボりたかったのだ。

「まあいいか、孝之どうある? 私としては泊まつてしましこのだが。ちやんと返事が聞きたい」

「喜んで泊まつていただきます」

「素直で宜しい。それじゃあ帰らつか」

「はー、それじゃあ帰つましょつか、慧音先生と俺の愛の巣にて~

そう言つた瞬間顔を微妙に赤くした慧音に頭突きされる。慧音と孝之は額を押された。孝之は額を押されながらも内心。

(つ痛……やばいな。慧音先生つて楽しい)

とかなんとか思つていたりする。

「ユリが私の家だ」

慧音はやう言つた。とつあえず孝之は言つた。

「ユリが俺と慧音先せ「まだ言つか!」」

「グフオオ！」

辺りにズゴォン！ という音が響き渡る。何故か全ての言葉を言わせてもらえなかつた。額が痛い。慧音先生つて面白いけど頭突きは嫌だな～ってか何で頭突きされたんだろ？。孝之はそう思つた。とりあえず痛みが引くまで額を擦りつつ、慧音の家の玄関に向かう孝之だったが、慧音の家の玄関が開かれ白髪の女性が現れた。

「なんかさつき凄い音がしたけど？ 何の音？ 慧音？ そこで何頭を押さえてるの？」

田の前の女性がそう言った。白髪のロングヘアに深紅の瞳の長身の女性があり。髪には白地に赤の入った大きなリボンが一つと、毛先に小さなりボンを複数つけている。ファッショնなのだろうか？上は白のカツターシャツで、下は赤いもんべのようなズボンをサスペンダーで吊りており、その各所には何か護符みたいなのが貼られている。やつぱりファッションなのだろうか？

孝之はとりあえずその白髪の女性に自己紹介をすることとした。

「はじめまして、飯野孝之といいます。慧音先生の教え子です。孝之と呼んでください」

「はじめまして、じー寧にじつも、私は藤原 妹紅、適当に名前は呼んでくれてかまわないから、よく慧音からキミの話は聞いてるよ、孝之よろしく」

「ようじー、妹紅さんと呼びますね……所で慧音先生がよく話を聞くとは？」

「ああ、よく聞く話が、寺子屋で一一を争う悪戯好きの子供だが意外と努力家で誰にでも優しいけど寺子屋のある子供と一緒に悪戯をされたら手がつけられないと……そんなところかな？」

「……何か嬉しいような嬉しいような、とりあえず慧音先生は

良く寺子屋の子供達を見てることがよく分かりました

「キリも子供だろ」

妹紅が笑いながら言った。孝之も笑いながらも、確かに俺も含まれますね、そう言って自己紹介を終えた。

慧音は先ほど自分がした頭突きがまだ額が痛いのだろう、額を押さえながら孝之を涙目で睨む。

「なんか慧音先生が怖いです」

「孝之、慧音に何をしたの？」

「いや、あれですよ、俺が慧音先生の家を見てとある事を言ったのが原因だと思います」

孝之はそこで言葉を切る。慧音は未だに孝之を涙目で孝之を睨む。

「で、何を言ったのさ？ 慧音がここまで睨むなんてなかなかないと思つんだけど」

「ただ俺が、俺と慧音先生が一緒に住む家ですか！ と言つたんで

すよ。実際は“ここが俺と慧音先せ”の辺りで強制的に止められました。とりあえず思いつくながりではこのくらいです

妹紅は不思議そうに頭を傾げていた。何処に怒る要素があるのかと考えていたのだが、その話を聞いた慧音は額と顔を赤くしながら慌てて孝之と妹紅に家に入ろうと言つてくる。

「えつ……あー、晩御飯を作つて食べない?」

慧音が言つた。晩御飯と言つたが時間的には16時ぐらいだろう。全然早い時間である。

「晩御飯つて、まだまだ先じゃない」

「慧音先生つてこんなに晩御飯を食べるの早いのかな?」

「普通ならもう少し遅いんだけど、今日はやけに早いかな?」

慧音は顔を真っ赤にしながら無言で早足で家に入つていった。

「何を勘違いしてたのか知らないけど照れてたね」

「そうですね。何か慧音先生……照れでましたね」

そうお互いが言って妹紅と孝之は顔を合わせ同時に微笑み慧音の家に入つていった。

慧音の家に……作者の知識があれなので慧音と妹紅がオリキャラみたいになつて

何かじめん書きたいのに文書がなかなか思いつかなかつた。

それにダメダメすぎる。

書きたい事とは違つ事になつてゐる。

批判または感想ください。

明日にでも編集などします。

主人公設定を後で編集しなおします。

作者は微妙にスランプ中です……とりあえず5月10日までには更新したいとおもいます。

慧音の日記？（妹紅と慧音のしゃべり方が変だと思う人は主人公設定を見てく

スランプ状態から復活できない……とりあえず書いてみた。

そのうち編集とかするかも

慧音の日記？（妹紅と慧音のしゃべり方が変だと思つ人は主人公設定を見てく

孝之が慧音の家に泊まる「こと」になつて早くも5日ほど過ぎていた。

今慧音の家いるのは孝之一人だけである。慧音と妹紅は買出しのため家を空けており孝之は留守番することになつているのである。

「はあ～……暇だな～」

孝之はつぶやく。

慧音の家で留守番する「こと」になつて早くも2時間ほど経っている。孝之は周りを見渡す、慧音の家には時間をつぶすものがない、本などはあるが2日前に読破したものばかりである。

慧音先生の机に何かないかな……そう思つた孝之の目にあるものが映る。

「これは……何だろ?」

孝之の目に映つたもの、それは何かのノートみたいなものだった。何のノート？　なんか興味をもち始めた孝之は手を伸ばす。勝手に見たら怒られるのは重々承知なのだが本能には逆らえない。

「うん……体が勝手に動くんだから、俺は悪くないはずだ」

自分に言い訳をしながらノートを取り、そのノートを開く。

3月10日

今日2名の子供が寺子屋で勉強したいと言つてきた。名前は飯野孝之と遠野俊之といつ名だった。両親に許可は取つてあるとのことだった。

寺子屋の子供たちに紹介するとすぐに仲良くなつた。とても嬉しい。

「慧音先生の日記か……しかし行数とか少ないな……もつと見てみたろ」

孝之はそう言った。完璧に留守番をしていることを忘れているようである。孝之はノートに視線を移しだんだんと呼んでいく。

5月1日

今日も孝之と俊之がまた騒動を起こしてくれた。

これで18回目の騒動……いい加減に慣れたのかもしれない。

孝之と俊之が寺子屋に来た頃がとても懐かしい。

しかし、孝之と俊之は周りの子供たちとは違う感じがする。言葉

にするなら精神年齢が高い。そう言えるのではないだろうか？

とりあえず罰として孝之と俊之に大人でも解くのが難しい問題をのせた宿題を出した。期限は4日以内と言つておいた。今日はこれ以上書くのをやめておこう。

5月2日

家に帰る途中に孝之に出会った。

何でも母親が風邪で寝込んでしまったらしいから買い物にいくんだとか、良い子だと思ったが授業しているときも良い子でいてほしいと思つたよ。

私も買い物に付き合つた。せっぱり孝之は良くてできた子だ。なんとなく嬉しい。

5月3日

孝之と俊之は天才なのだろうか。

前に渡した宿題を提出してきたのだが、完璧だつたの一言に気付く。あの難しい問題をここまで解けるとは恐れ入る。

それにも宿題の裏に書かれている絵は何なんだ私を怒らせたいのかそれともからかっているのか判断がしにくい。

9月10日

今日の孝之が変だつた。

よく溜息をついたりしているし、休み時間だと何時も騒がしいの

に何故か今日は騒がしくなった。もし何か困っていることがあつたら相談してほしいと私は思つ。

今日はこれ以上、書く気がしない。

10月3日

何故だらうか、この頃孝之ばかりに目がいく。
それに孝之を見ると妙に心臓の音が煩くなる、どうしたのだろう
か、私は何か病氣でも患つているのかな?
しかし私は生まれてからずっと病氣とかにかかつた覚えはないん
だけどな。

10月7日

孝之がこの頃、寺子屋に来なくなつた。
どうしたんだらうか、とても心配だ。明日にでも孝之の両親に聞
いてみよつと思ひ。
アア孝之、君は何をしているんだ。

10月8日

とても心配だ。

孝之の両親に今日会つたのだが、どうやら孝之は魔法の森に住んでいる友達のところに泊まりに行つたりしているらしい。少しその友達がうらやましく思つてしまつた。何故だらう? とりあえず今日孝之は帰つてくるらしいので、明日からまちやんと寺子屋に来るとのことだ。明日から孝之に会えると思うと嬉しい。

「……あの時の宿題があんなに難しかったのは罰だったのか……なるほどじね、つと続き続きつと「それはそんなに面白いか?」「え?」

誰かの声がした瞬間、孝之の肩に何かが置かれる感触がした。孝之は肩に置かれた何かを見る。それは手だつた。とても綺麗な手だと思つたのだが手の甲から血管がめつちや浮き出ていたため綺麗とは言えなかつた

後ろから何か凄い重圧を感じるのだが、といふか振り向いたら何かのフラグが立つんじゃないかな……振り向いたら何かのフラグが立つてしまつと予感した孝之だったが、別に振り向かなくともフラグはすでに立つっていた。

「孝之……君は何をしているのかな?」

「えつと、慧音先生の口記を見てました」

「ほひほひ、それで……私の名前は何ですか?」

「上白沢慧音先生です」

「よくできました……さて、覚悟はできているかな？」

先ほど声をかけてきた人物……慧音が孝之に私刑宣告をした。孝之は後ろに振り向き慧音の顔を見る。

ああ、死んだな、これは……孝之は潔く諦めて、慧音の前で正座をする。

「良い覚悟だね。妹紅、鍋の準備はちょっとだけ一人でしてくれませんか？　すぐに私もしますから」

「わわわかった。す……すぐに来てね」

妹紅は少々震えながら鍋の準備をはじめめる。

「じゃあ……立ち上がって

孝之は慧音の言つとおりに立ち上がる。

慧音が少し腰を低くして孝之と同じ田線になる、孝之と慧音の田線が合い1分ほど見つめあう。慧音が口を開く

「そんなに見つめないでほしい、照れてしまつから」

「くつ？」

予想外の一言に孝之はビックリするが、とりあえず孝之は田線をはずし妹紅を見る、妹紅はせっせと鍋の準備をしており、今は鍋の材料を切っていた。

孝之はふと妹紅のそんな後姿を見て。妹紅さんが俺の嫁さんになつてくれたらな……そんなことを思つてしまつ。

妹紅は男性に刃くす系のタイプと孝之は予想している。孝之はもしも自分に刃くしてくれる妹紅の姿を妄想してしまい顔がにやけてしまつ。

刃くしてくれる妹紅さんって意外といいかもしれない……。そう孝之は思つたのだが。

「…………刃くしてくれる妹紅さんって意外といいかもしれない」

「何が刃くしてくれる妹紅さんって意外といいかもしれない……どうこう意味かな？」

「いや、何でもないです！」

「ひひやら小ねく声に出してしまつたようである、慧音の機嫌が悪くなる。孝之は全然理解できぬいではいたが一つだけ分かった事があつた。

完璧に地雷を踏んだな……と。

「そりか……孝之、腹筋に力を入れろー！」

「何でイキナリ腹筋！」

イキナリの私刑宣告にビックリするが孝之は腹筋に力を入れる。目を瞑り衝撃が来るのを待つ。そして……。「ゴンッ！ 普通は出ない音が回りに響いた。

「ぶらあ！ 腹筋……かんけないじや……」

孝之は頭を抱え転げまわる。余りの痛さに足をバタつかせ涙が流れていく。孝之が腹筋に力を入れる意味は無く、慧音は腹を殴らず頭に頭突きをしてきたのである。

「ふん！ 今日は少し反省しなさい。」

孝之は余りの痛さにその場で気を失った。

孝之の今日の出来事

- ? 慧音の日記を発見、見た後に慧音に頭突きでノックアウト。
- ? その日の慧音宅の鍋は寄せ鍋だつたとの事である。孝之も田を覚ましちゃんと鍋を食べたとさ。
- ? 両親の治りがまだ微妙に遅いためまた1週間ほど慧音宅で寝泊りすることになる孝之。
- ? 妹紅の胸は意外と大きかった……（一緒に風呂を入ったため分かつた）

慧音の日記？（妹紅と慧音のしゃべり方が変だと思う人は主人公設定を見てく

あ～……とりあえず最低な内容かもしれない
ぜんぜん何ていうか書きたい文がこ～出てこないって感じで……。

感想などお待ちしております。

孝之が妹紅に妄想したこと

妹「あなた、あ～ん」

孝「あ～ん」

妹「あなた、お背中を流しにまいりました」

孝「ああ、頼むよ妹紅、嬉しいな」

妹「はい！ 私も嬉しいです！」

妹「あなた、愛します」

孝「俺もだよ」

妹「あなた……」

「こんなこと考えてる俺きめえ。

遅刻をした理由。（ある意味番外編？）といえず次話から一気に年数が飛びま

スランプなおりんよ。

遅刻をした理由。（ある意味番外編？　とりあえず次話から一気に年数が飛びま

「あつはつはつはつは！　遅刻しちゃいましたー！」

人里にある寺子屋、その寺子屋で一人の子供と一人の大人が向かい合っている。向かい合っている人物は上白沢 慧音と飯野 孝之である。もちろん他の子供たちはいるのだが慧音の発するなにかに一人を除いてガタガタと震えている。

震えていない人物は遠野 俊之という人物で飯野 孝之の親友である。孝之は俊之をチラリと見る、俊之はニヤニヤしながら慧音と孝之を見ており孝之にたいしては、何か期待しているような目で見ている。

「孝之、理由は？」

慧音がめっちゃ良い笑顔で孝之に話しかける。良い笑顔なのだが孝之からしたら、その笑顔は目が笑ってない、青筋がピクピクと浮かんでいる、まさにその笑顔、般若の如くである。

何故怒られているのか、文章にすればたつたの一文字、所謂『遅刻』である。普通の20分または1時間程度の遅刻だつたら氣をつ

けろ程度な注意になるのだが、孝之の遅刻の場合……。

「私の記憶が正しければ孝之は朝早く起きて私より早く家を出たはずなんだが？ なのに何時過ぎに寺子屋に到着？ 理由を聞かせもらおうか」

そう、孝之の場合は寺子屋の登校時間から5時間以上も遅れて来るのである。寺子屋も、もう終わりかけのところで孝之がやつてきたのである。

「あー、遅刻した理由はですね……」

孝之は口を開き遅刻の理由を素直に言おうとしたのだが言ことよどんでしまつ。言いよどんでしまつた理由、それは嘘の言い訳をしたほうが良いと直感めいたカンがそう言つていたからである。だから孝之は言ことよどんだのだ。孝之は俊之を一瞬見る、俊之は何か面白そうな事を言えと言つていいるような期待しているが見たいな目でコチラを見ている。しょうがないな、そつ孝之は心の中で思つ。

「…………実は」

「…………実は？」

辺りに何故か緊張感が走る、慧音と孝之のいる景色が何故か皆には歪んでいる様に見えた。ゴクリと誰かが唾を飲み込む音が聞こえた。それを合図に孝之は嘘の理由を言つた。

「俺が王族の人間だからです」

「……は？」

慧音の顔が面白いぐらい変な顔になる。というより何言ってんだコイツ見たいな顔で孝之を見る。孝之は手を広げ演説するかのごとく大きな声で言つた。

「今まで隠してきましたが、俺には帰るべき国があるのです。何故、我が王族が遅刻しなければならないかと言つて。第一国王であらせられたコウ様が4つの年をまたがれた時、お告げを受けたと言われています」

だんだんと孝之はテンションが上がるのを感じた。何故なのだろうか、凄く面白い、そう孝之は思つた。

「四方に金と赤の光を射したもう、ハン様でした。「マ・ルドゥ・ピチューーン」と唱えられました。ハン様の額が赤く輝きますと、コウ様の御身はムチを打たれた仔馬のように開放され、熱い慈愛の波と共に、その頭には軽く風になびかん木々の如くたおやかな髪が広

がっていたのです」

慧音は何か戸惑っている様子だった。戸惑つというよりガタガタと震え何か怖いものを見るような目で孝之を見ていた。その様子を見て孝之は内心これはいける、そう確信した。だから孝之は続ける。
説教^{すつき}をされないために。

「さて、この時、かのスタープ様はと言いますと寝所にて、芽吹きを待つ花のように安息の眠りについておられましたが、突如襲った胸の高鳴りに声をあげました「カンパニール……！」と

チラリと孝之は椅子に座っている俊之を見る、腹を右手で抱え机をバンバン叩きながら笑っている。

慧音は慧音で額に汗がつかんでおり何か言おうとしているのだが、その言おうとした言葉を遮らんとせらりと続ける。

「あつあ～～、あの、ちょっと「カンパニールとは我が国の言葉でし
て、つまり「来たれ神威の海、放たれよ尊崇」という言葉であり「
すまないが、これから人と会う約束があるから、授業は終わりだ！」

慧音は脱兎の如くその場から立ち去ろうとしたのだが、孝之は慧音の服を掴む、何故ならば今逃げられたら慧音の家に帰ったとき、遅刻の原因を聞かれそうになつたからだ。それに、まだ……。

「ハン様の説明がまだです」

孝之はまだまだ話が途中なので全部聞いてほしい、目的が二の次になってしまっている孝之であった。孝之は慧音の顔を覗き込む、慧音の顔は涙が滝のように流し鼻水もでていた。ちょっとやりすぎたかな？ なんて思つてしまつたが、まだ物語りは終わつてないからしきりがない、孝之は声に出さず心の中で呟いた。

「ハン様は「わかつた！ わかつたから遅刻の理由も聞かないから勘弁して！」……わかりました。ですが、また今度、遅刻したら続きを言いますからね、楽しみにしていてください」

慧音は涙声でそう言つた。その声に孝之は少々ドキドキしながらも冷静を装つ。

「とりあえず、これで今日は終了かな？ 慧音先生、お疲れ様でした。俊之いぐべ～」

「了承したぞ。同士孝之よ」

孝之は寺子屋から出て行き、俊之も田に涙をつかべながら孝之の後に続ikip子屋から出て行つた。

寺子屋の帰り道、夕田が昇り村をキラキラと照らす。まるで一つの芸術みたいな光景が孝之の目の前に広がる。孝之はこの光景を見ると何時も思う。転生できて……こんな光景を見れる俺は何て幸せなんだろ？、そう思ってしまうのである。

「で、なんで遅刻したんだマイブライザー孝之よ

「同士になつた覚えはあるが、マイブライザーになつた覚えはないぞ、俊之よ、まあ、なんで遅刻したかといつとだな……寺子屋の近くに道具屋「霧雨店」つてあるだろ？」

「ああ、確かにあるな、霧雨」「道具店」大手の道具屋だな、そこで何をしていたのだマイブライザー孝之よ

俊之が問いかけてくる。孝之が5時間も遅刻した理由、歩きながら俊之の質問に答える。それは……。

「霧雨店の一人娘の霧雨 魔梨沙つて知ってるか？」

「霧雨 魔梨沙か……知ってるぞ、男勝りな口調、喋り方の特徴として語尾に「～だぜ」「～か?」をつける。ウェーブのかかった、金髪のロングヘアが特徴的。あと寺子屋には通つてない」

「ああその霧雨 魔梨沙で間違いないよ。って、どうしてそこ今まで知つてるんだよ? もしかしてストーカー?」

「失礼なことを言つた。孝之、俺は情報を集めるのが好きなだけだ。それで、いい加減に教えてほしい」

「まあ、なんと言えばいいのやら。そうだな……分かりにくくへ言つならば子供は勉強が嫌いなんだ」

「なるほど……確かに嫌いだな、俺も勉強は嫌いだ、とりあえず今ので大体分かつた。あれであろう? 勉学はそっちのけで霧雨 魔梨沙と遊んでいた、そういうことだろ?」

「ああ、完璧だよ。パーfect俊之よく分かつたな。分かりにくくへ言つたから伝わらないと思つたんだがな」

まさか伝わるとは思つていなかつた孝之は少しだけ驚く。

「話は変わるけどさ、なんで遅刻したぐらいで慧音先生は、あんなに怒つてたんだろうってか怖かつたよマジで」

慧音のあの怒った顔を孝之は思い出し身震いする。最終的に攻守逆転で慧音がガクガク震えていたが逆転する前は孝之がブルブルガクガクと内心ではめっちゃくちゃ怯えていたのだ。

「ああ、とても心配してたからな、同士孝之の事を」

「俺の事を心配？ 何故に？」

何故心配なんてするのか。別に人里だから大丈夫だと孝之は思ったのだが、少し考えて慧音が心配するような原因があつた事を孝之は思い出す。

「オレがさらわれた時の事件か？」

「正解だ同士孝之よ。それで慧音先生は心配していたんだ。何回も寺子屋の授業中に孝之を探しに行こうとしてたしな、孝之が笑いながら遅刻したと言ったとき心配から怒りに変わったようだ。まあ、心配してたからこそ、その怒りも激しかったがな」

パート

「そつか……慧音先生」

孝之は瞼を閉じて慧音先生を思い浮かべる。あんなに怒つてたのは心配してくれたからなんだと、孝之は凄く嬉しく感じられた。そして、慧音先生に謝るうつと孝之は決意する。

「うひ、慧音先生の家に着いたな。じいじでお別れだ、俊之」

「ん、わかった。また明日」

「ねむ、また明日」

俊之は手を振りながら帰つていいく、孝之も手を振り慧音の家に入つていった。

孝之の今日の出来事。

? 土下座して慧音先生に謝つたら笑いながら許してくれ……なか
つた。頭突き10発は流石にキツイデス。

? 妹紅さんは今日は泊まらないらしい。なんでも喧嘩友達のところにいつてるとか。

? 夜中に慧音先生の日記を見たら病んでるようなシーンがあつたので忘れる事にした。

? 夢の中で神様が現れた。少々この世界は東方の世界の歴史とはちょびつとだけ違うらしい。とりあえず謝る前に神様はその服装はやめたほうが良いです。生理的に受け付けない。あと神様が何か俺の隠された能力があるとの事だった。何の能力なのだろうか?

遅刻した理由。（ある意味番外編？）といえず次話から一気に年数が飛びま

スランプが治らない。

文章がうまく書けない。

最低だ……。

とりあえずデータが消えてしまったから即興で作った。

批判など色々お待ちしております。

リアル……まじで忙しい。

「そういえば、あと二日ほどしたら孝之さんが私に弟子入り……と
いつより門番隊に入つてから三年経りますね」

場所は紅魔館の庭。

そこに孝之と美鈴が居て周りにはメイド妖精達が筋トレをしていた。孝之もメイド妖精の中で混じり腕立てをしている。

メイド妖精の背には二十キロぐらいの石が乗っていて孝之の背には美鈴が乗つかっている。

「いきなり……どうし……たんですか？　できたら……背から退いてくれると……嬉しいんですけど」

孝之は息を荒げ疲れた顔をしているが一定のスピードで腕立てしながら聞く。

「あと二十回ですから頑張りましょう。一応、後三日で門番隊に入つて三年目になるので御祝いでもしようかと思いまして何か欲しい物ありますか？」

「あー、欲しい物ない……ので背から退いてくれると助かりますね」

息を整えながら孝之は返答する。孝之にしたら何もこらないから退いてほしいと思っていたりする。

「……それで何が欲しいですか？」

美鈴は孝之の願いをスルーして再度孝之に何が欲しいかと聞く。孝之の背から退いてほしいという願いは却下されたようだ。孝之はスルーされた事がちょっとショックだったのだが、気を持ち直して美鈴に言った。

「腕立てが終わったら……考えますよ」

そこからたんたんと回数を数えていく。
やはり黙つているときのほうが腕立てに集中できる。

「…………十回と、はい百回終了です……お疲れ様！」

美鈴はそのまま孝之の背から降りる、それと同時に孝之はバタフと頭を立て倒れる。

「やつぱ……美鈴さんの訓練……厳しいですよ。といつよつ……子供の時から筋トレすると背が伸びないと……事になつたりするといつ噂がですね」

息を整えつつ美鈴に囁く。

「その事は大丈夫ですよ。パチュリー様が魔法で色々してくれますので安心してください。背は伸びますから」

「一回一回しながら美鈴は言った。孝之は遠まわしに訓練とかを易しめにしてください」という事を言つたつもりだったのだが、美鈴は気づかなかつたようだ。

その事に孝之は落胆する。

「で、何か欲しい物とかありますか？」

息が整つてきたところで孝之は真剣に欲しい物といつたら何がいいのだろうかと考える。

(欲しい物ねー。慧音先生の日記帳……却下、そもそも慧音先生の日記帳なんて手に入らない。ならレミリア様の泣き顔の写真……力メラがないので却下だな。ならアリスさんのグリモアを……そもそも泥棒行為だから無理だろ。なら咲夜さんの銀ナイフ……咲夜さんに言つたら普通に貰えそうだから却下だなー。欲しい物……全部無理じゃん)

孝之の悩みまくっている姿を見て美鈴は何かを思いつき話しかける。

「そんなに悩まなくていいと思うんですけど……欲しい物がないなら孝之さんに一度プレゼントしたいものがありますので、それでいいですか？」

その言葉に孝之はマジっすか的な驚いた顔をしてしまう。孝之にしたら欲しい物はあるけど全部無理だという結論がでていて、美鈴の言葉は天から神が手を差し伸べてくれたの如く嬉しかった。

「マジですか！　ところどころプレゼントってめっちゃ気になります！」

「ふふ、三日後に分かりますから楽しみにしてくださいね。それでは、また明日お会いしましょうねー」

美鈴は花が咲いたような綺麗な微笑みを浮かべながら未だに筋トレをしているメイド妖精の訓練に戻る。孝之はプレゼントの気に入るがとりあえず空を飛び家に帰る事にした。

今回はこれで終わりです。短いですけど簡便を……スランプ状態な

ので文字など展開などは無視してください。

あと にオマケ

「やつと人里の入り口が見えてきた……てか三時間ぐらい歩いてたからだるいわ」

紅魔館から人里まで三時間から四時間ぐらいかかる。空を飛んだら一時間で人里まで簡単に着くのだが……。

「まさかのガス欠つて……まだ努力が足りないって事なのかなあー。
ハア～」

孝之が紅魔館から人里に向かう途中に魔力が尽き地に落ちてしまい、途中から歩きになってしまったのである。

「……っん！」

人里の入り口があと少しというところで誰か知ったような人達を発見する。孝之は手を上げ叫ぼうとしたのだが、……やめた。

その人達が慧音と妹紅だからである。妹紅だけならば孝之は叫んでいたかもしれないが、慧音が一緒だと確實に孝之の額と慧音の額がゴツツン（言うなれば頭突き）するからである。というよりも何時も無断で慧音に黙つて人里から出ていたため、慧音に見つかつたらヤバイのである。

孝之は来た道を戻り遠回りして人里に入ろうと決意する。

「……触らぬ神に祟りなし……くわばらくわばら」

孝道はそう言つて慧音と妹紅に背を向け来た道を戻ろうとした瞬間、孝之に電流走る。

「孝之いいいいいいいいいいいい！」

「ちよつー、慧音えええええ！ 手を離してええええええ！」

じゅやい顔を向けて戻るのが遅かつたひしへ、慧音に見つかってしまう。

爆走する慧音と慧音に引つ張られ宙に浮いてる妹紅が孝之にだんだん近づいてくる。まるでそのスピードは猛牛の如く。

「ちょ！ 待つて！ 落ち着いて！ 落ち着いてください慧音先生！」

孝之は慧音のスピードに足が震えて動けなくなってしまふ。

「待つて！ 落ち着いてください！ だからおひつこつぶはあああ！」

慧音の鋭いタックルが孝之の鳩尾を入り地面を抉るが如く倒れ、妹紅は顔面から凄い勢いで地面にダイブし死にかけている妹紅。

「もおおおお！ 心配したんだぞ！」

頭をグリグリと鳩尾に押し付け思いつきり体を締め付けられ苦悶の声を出す孝之と、意味不明な事を言いながら体をピクピクさせてる妹紅。

「ツゴホ……ゴホ！ ちょ……やめ……ガクッ」

「パタパタ…………とりい…………わたしは…………とりい」

「これからあまり心配させないでほしい。せめて私に人里からちょっと出ると一言をだな言ってくれ……お前の事が心配で心配で」

超スランプです！

が！ 私はこれを投稿します！

ガラスのハートの持ち主である俺だが批判でも何でも引き受け
ええええ
い！

美鈴が自慢している花を見ながら、孝之と俊之は、咲夜から貰つた弁当を食べていた。

「なるほど、それで今日、美鈴隊長からプレゼントを貰つとな、ふむ、なら俺もなにか送らないといけないではないか」

孝之は隣で弁当を食べながら何故か燃えている俊之に呆れてしまつた。

「なにを呆れたような顔をしている、ブラザーハウスの記念日なれば、俺も祝うのが当然だろ？」「

何を言つてゐるのだ、と言ひながらやれやれと首を横に振る俊之に殺意が沸くが、祝ってくれることなどとてもあつがたいし、嬉しいものである。

「ふむ、ブラザーヨ、五分ほど待つてくれ、すぐに持つてくれる」

「へへへ、それよりも迷うなよ」

そう言つと箸と弁当を置いて何処かに行ってしまった。

俊之が何故、紅魔館を来れるようになったのか、それはレミコア

の気まぐれである。

レミリアが気まぐれで一人だけならば、紅魔館に招いても良いとの事で、孝之は俊之を招いたのである。

俊之は吃驚していが、すぐに順応したのだ。

そして、あいつは天才なのであるうか、紅魔館に来てから直ぐに自分に能力があることを発覚し、紅魔館の門番隊に入つたのである。美鈴から武術を一年前に一緒に習つてはいる、あいつが真面目にやつていれば直ぐにでも追いつかれ、追い抜かれるであろう。どれくらい天才なのかというと、孝之が覚えるのに一ヶ月も苦労して覚えた技を、俊之はたった五日で習得した。

孝之は本当に俊之の才能が羨ましくてしかたがない。

「あいつがちゃんとしていたら……あいつの才能が羨ましく思えるな、そろは思いませんか、サボリの美鈴さん」

「休み時間なので、此処にきました、ところで確かに羨ましく思えますね、ですが、彼のサボリ癖が駄目ですね」

気配を消しながら忍び寄つてきている美鈴に気づいた孝之は美鈴に話しかける、座つてもいいよと花生をポンポンと叩いた。

「では失礼して……本当に羨ましいと思います、才能の塊、もし彼が眞面目にしていたら、想像ただけで怖いです」
「ですよね、俺もそう思います……す……なんですか、それ」

隣に座つた美鈴をチラリと孝之は見て言葉が詰まった。

美鈴がなにかでかい箱を持っていたからだ。

「あ、これですか？　これはですね、孝えさんへのプレゼントです
よ」

「一ひとつそのままハイと渡されそうになつた、だから、孝えは
弁当箱と箸を置き、そのでかい箱を受け取つた。

「開けていいですか？」

微笑みながら頷く美鈴に、孝えはでかい箱を開封した。

「なにか……な……ふう、氣のせい氣のせい」

すぐに閉めた。

（まさか予想よりはるか斜め上を行くとは美鈴さん……これプレゼント
ントといつよりパンドウの箱じゃないですか）

せじも孝えも、美鈴から貰つたプレゼント……といつよりもパン
ドウの箱にはビックリした。

「あれですか、処理できなーから俺に任せたと、プレゼントじゃなくパンダの箱を渡したと、そういうことですか、流石にあんな趣味ないですよ?」

「や……気のせこです、ちょっと暇なときしてたらできただってことか……私は忙しこの失礼します!」

「せっかく休み時間ついて言いましたよねー!」

そのまま脱兎の如く逃げていった美鈴に孝介は落ち込んでしまった。

まさかプレゼントとこいつ名のパンダの箱を受け取る事になると思わなかつたからだ。

「まさか……1／1スケールの咲夜さん人形、俺にどうしてほしいんですか、咲夜さんに殺されるとでも言つてますか」

いなくなつた美鈴に愚痴を言つてしまつるのは仕方ない事だといえるだらけ。

「食欲なくしてしまつたな……俊之が帰つてくるまで食べずに待つておひょうかな」

耳を澄まして自然の音を聞く、孝之の癖の一種で、耳を澄まして周辺の音を聞くという癖だ。

「本当にいい音がして

「ちよ、咲夜さん、私がなにかしましたか！」

「問答無用、貴方は死ぬのよ、今日はいいでー。」

なぜか美鈴の悲鳴と咲夜が怒り狂った声が聞こえたが、孝之は全てを無視と決め込む。

たとえ美鈴から貰つたプレゼントといつかのパンドラの箱の位置がずれても気にしない。

「今日は本当にいい日

「厄田なんだろ?」

孝之は本当に厄田だと思った。

まさか美鈴から始めて貰つたものが形見になるついでに、この調子だと俊之のプレゼントもなんとなく分かつてしまつ。

何故か遠くで、私はまだ死んできませんよおおお！ と聞こえたが氣のせいだろう。

「先程、美鈴隊長の悲鳴が聞こえたが、なにがあったのか？」

「いや氣のせいだらう、おかえり」

「ただいま、孝之よ、これが俺からのプレゼントだ」

俊之から貰つたのは美鈴から貰つたものより数十センチほど小さな箱だった。

(なんか嫌な予感がするな)

「どうしたんだブラザー？ 早く開けてみるがいい

呼び方を統一しようと孝之は言いたかったが、とうあえずプレゼントを開けることにした。

嫌な予感しかしながらたが。

「なるほどね、これは誰が作ったのかな？」

「俺だ」

(美鈴さんと俊之は同じだったか、駄目だこいつ……早く何とかしないと……)

俊之から貰つたものに孝之はなんとも言えない疲労感が襲つてきた。

「俺にこれをビデオすると?..」

「いや、なに、前に作つたんだが、ふむ、後の処理は任せたぞ」

そう言つた瞬間、俊之は走り去つた。

「処分するのに困つたからってね……1／1魔理沙人形、はいはいワロスワロス……鍛錬はできなさそだし帰ろつ」

その後、孝之はでかい箱と小さい箱を持つて帰つて、人形を部屋に飾つたら、養豚場の豚を見るような目で見られたのは悲しい出来事だった。

後日ちやんとしたプレゼントへを咲夜ヒリシアとパチュリー & 小悪魔に貰つた。

ヒリシアからはプレゼントと言つたの執事に命じられ、咲夜からは一発だけ叩かれメイド服を、そしてパチュリーと小悪魔からは魔術書を貰つた。

パチュリーと小悪魔に一番感謝したのは言つまでもない。

さらにさりに妹紅と慧音が家に来て、慧音に「養豚場のブタでもみるかのように、冷たい目、残酷な目で……」「かわいそうだけど、あしたの朝には、お肉屋さんの店先にならぶ運命なのね」ってなんじで軽蔑されたが、妹紅は分かつてくれて後日、俊之にお仕置きをしてくれた。

あー……言訳はしない。

なんとでも言つてください。

紅霧の異変にラブコールと大妖怪

「時刻は朝の8時か……暇だな」

飯野孝之宅

孝之は咲夜の人形を抱きながら部屋で「ゴロゴロ」していた。傍から見ればその様は変態と同じである。

「どうしようか、慧音先生からは家から出ると言われているが……」

「どうしたらいいのだろうかと、咲夜人形の胸に顔を沈めながら孝之は悩む。

四日前ぐらいから慧音に自宅謹慎を申し付けられたのだ。

理由は人里に赤い霧が出始めたからだと慧音は言っていたが、孝之にしたら、霧の一つや二つどうしたのだと言いたい。

（だがまあ、妖霧だからなあ……ずっと当たつてたら普通は体に異常をきたすんだっけ？）

紅魔館の大図書館でそれらしいものを孝之は何回か読んだことがある。

(慣れていけば、別にいけるらしいが……紅魔館に行つてゐるせいか、耐性みたいなのがついてしまつてゐるのかな?)

実のところ孝之は慧音の言いつけを守つていない。

霧にずっと当たつても体に異常は見られないからだ。

そして霧を出しているのがレミリアである事も知つている。が、

慧音と両親、人里の皆には話していない。

霧を出している人物を知つているのは自分を除いて俊之と紅魔館の住人たちだけである。

(……紅魔館に行くか)

孝之は時計を確認し家を何時出るか決める。

(時刻は8時30分、父さん達には挨拶抜きで出ても大丈夫だろう、近頃あんまり心配されてないし)

孝之は咲夜人形を離し、黙つて家を出た。

「……濃いな、霧が濃いよ、慧音先生に見つからないようにしない

と

霧で覆われていてる人里を歩いていく孝之。
人が一人もいないので独り言などボロボロともれてしまつのは仕
方がない。

孝之が歩いていると、孝之が良く知る女性、藤原 妹紅が歩いて
いた。

孝之に気づいたのか手を振りながら歩いてきている。

「おはよひ。今日も誰かと遊ぶのかい？」

「おはよひ」やこます。「この霧の中で誰と遊べといふんですか、慧
音先生の頭突きを食らひ覚悟で遊ぶ人なんていませんよ」

孝之は妹紅にあいさつをする。

「いるじゃないか。孝之の親友である俊之が」

「残念ながら、あいつは昨日、香霖堂に行つて本を読みに行くと言
つてましたから……といつより、注意しないんですか？」

「なんとなく孝之ならしそうだなつてね。別に注意をしようだなん
て思つていなかつたが」

なるほど、と孝之はつなづく。

少しだけ妹紅に自分の印象はどんなのか聞きたくなつた孝之で
あるが、それは聞かないとした。

「しかし、慧音に報告しないといけないのかな？」

「なにをですか？」

「出歩いていたことをかな？」

「勘弁してもらつていいですか？」

「慧音が煩そだしなあ……そつこえは最近美味しい団子を売つて
る店があるので。一緒にどうかしら？」

これを言われて孝之はピントときた。

つまり妹紅は遠まわしにこいつ聞いたいのである。

「奢れ、子供に奢れといつのですか……」

なんという大人だ。と心の中で思つたりするのだが、そのような事は絶対に口が裂けても言えない。

言つたら最近流行りのスペルカードで燃やされてしまわないかね
ない。

「いいじゃない、別に減るもんじゃないし」

「俺の貯金している金がなくなります……もつとべつのものとか」

「無理かな？」

「……めつちや嫌ですけど仕方がないですね。今度奢りますよ」

そんなに私に奢りたくないのか、と言つそつた顔で孝之を妹紅は

睨む、が、孝之はそれを見なかたことにし、話を変える。

「そりいえば近頃太陽の光が遮つてますよね。花とか大丈夫なのでしょうか？」

「……どうなんだろうね。太陽の光が無ければ花たちは元気にならないからね。しかし、どこの誰なんだろうね。幻想郷を包み込むような妖霧を作り出すなんて……私の感だと、相当の化け物と思うかな」

「……化け物、ですか？ そうなのですか？」

「化け物だと私は思うわよ。これは博麗の巫女が動いたとしても解決しないんじやないのかしら？ 五分五分だけどね、それに慧音から聞いた話だけど、あの大妖怪である、風見 幽香が犯人探しをしてるらしいわね」

大妖怪、風見 幽香、これは幻想郷に住んでいるものならば一度は聞く名前である。

孝之はその風見 幽香の話は何度か聞いたことがあった。

ドジ、自分に仇名すものはすべて排除する妖怪、花を、特に向日葵をこよなく愛する妖怪。

ほかにも色々と噂がある、妹紅の言葉を聞いて、孝之は背筋がゾッとした。

(レリア様……あの子のためだからってやりすぎたんじゃないですか？ このままだと……家に帰つて寝ようかな)

この霧を出している人物を知っているだけに、内心冷つとした孝

れであった。

「俺はそろそろ行きますね」

「ふふっ……私は見回りを再開するよ」

それじゃあ、と軽く手を上げてもんべのポケットに手を突っ込みながら、妹紅は消えていった。

「なんだろう、すごく嫌な予感しかしない。けど、慧音先生には言わないと約束したし、だいじょ……ああっ！」

孝之になにかすごく重要な事を見逃していることに気がついた。

「妹紅さんと約束してないじゃん……ただ奢る奢らないの話しただけじゃないか」

慧音先生からの強烈な説教をどうするべきか、と頭を抱えながら紅魔館を田指す孝之であった。

(ヘリリア様、流石に霧が濃すぎます)

孝之の周りには見渡す限りの向日葵。

何時も通りに孝之は紅魔館を田指していたのだが、どこでどう間違えたのか、博麗神社周辺にある太陽の畠と呼ばれる場所まで、孝之は来てしまっていたのだ。

向日葵は元気がなく、一部が萎れていた。

向日葵を見ながら、孝之は今の現在位置を把握した。

(よりにもよつて風見 幽香が良く見かけられている場所、太陽の畠か)

風見 幽香が育てているであろう向日葵が咲き誇っている場所、太陽の畠、どれが孝之の現在位置であった。

(.....説教の事を考えながら田指していたからか？ しかし、考え事しながら紅魔館を田指す事はよくあるが.....分からないな。うん、すべてあの人せいだ)

妹紅さんのせいにしよう、それが孝之の出した結論であった。

(しかし、なにこれ.....すうごく嫌な予感しかしないんですけど)

今まで生きてて最高とも言えるぐらいの警報、所謂勘が、孝之にこの場から逃げると言つてゐるのである。

「はやく行こ……嫌な予感しかしない

そう孝之が呟いた瞬間であつた。

孝之の後ろからなにかジヤリッと十を踏む音と、警報かんぱいがやばいぐらいいに、脳内で響き渡つた。

「そこ」の貴方、少しいいかしら？」

その言葉を聞いて、孝之は振り向きながら思つたことは。

(あ……俺死んだ?)

明るい服を着て、緑のショートボブに真紅の瞳。そして、傘であつた。

「ちょっと聞きたい事があるのでだけれど

孝之の田の前に、大妖怪である風見幽香が佇んでいた。自分の運を、孝之は呪つた。

紅霧の異変にラブコールと大妖怪（後書き）

孝之「なん……だと……？」

俊之「なん……だと……？」

霖之助「君たちは僕の店に来て何をしてるんだい？」

孝之「展開はや？」

俊之「ふむ、これは早いとしか言いつづがない」

霖之助「君たちは何を言つてるんだ……薬師に知り合いかがあるから話しておこひ」

作者「ひどい……」

霖之助「というより君は誰なんだ？　お密さんかな？」

作者「感想をお待ちしております」

霖之助「やれやれ……僕の店にまともな密は来ないのだらうか？」

作者からの報告

PCが壊れてから数日経ちました。孝之伝とネギまの小説書き溜めしてたのですが……それがパーになつたから、少しテンションが上がりきらない……つとこより、まるつきり上がらないと言つたほうが正しいのかな?

一応、思い出しながら書いているのですけども、まだぜんぜん完成してないです。

……もう書置きせずに、書いたやつページと載せようかなーと思つていたします。

なので、更新が少し早まります。

もう展開とかそんなの関係なしで書いて載せますので……小説が雑になりますけども、どうかよろしくお願ひします。

お知らせ

お久しぶりです。作者のアリストリアです。
近頃お腹の調子がよろしくないのでけども、まあなんとか元気
にやっています。

いやはや本当に困ったものですよ、Hiroとパスワードを忘れてし
まうなんて本当に俺の馬鹿としか言こようがない。

それで本題なのですが、東方孝之伝は更新しません。更新は
しませんが、東方孝之伝（再）というタイトルで新しく書こうかと
思います。

プロローグからやり直すといつことです。やり直すと言つても少
し編集する程度です。

もしかしたら新しく話数を増やしたりするかもしだれませんけどね。
消す理由は……プロットとか消しちゃったみたいな？（笑）
やり直しながらプロットを思い出していく感じでやりたいのです。

とまあ以上です。

これからもよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9714k/>

東方孝之伝（努力伝）

2011年11月5日11時18分発行